



文部科学省

国立教育政策研究所

National Institute for Educational Policy Research

| | |
|-------------|----|
| いじめ | 追跡 |
| | 調査 |
| 2007 - 2009 | |
| いじめ Q & A | |

平成 22 年 6 月

国立教育政策研究所生徒指導研究センター

目 次

| | |
|------------------------------|----|
| はじめに | 3 |
| 本冊子について | 4 |
| ■やはり、いじめにピークはないのか？ | 5 |
| ■やはり、どの子どもにも起きうるのか？ | 6 |
| ■6年間の追跡で、何が分かったのか？ | 8 |
| ■いじめに向かわせる要因は、何か？ | 10 |
| ■いじめを、どう減らしていくのか？ | 12 |
| ■ネットを使ったいじめは、増加したか？ | 14 |
| ■調査の概要 | 15 |
| ■ 2007～2009年度 小学校 いじめ被害経験率 | 16 |
| ■ 2007～2009年度 小学校 いじめ加害経験率 | 18 |
| ■ 2007～2009年度 中学校 いじめ被害経験率 | 20 |
| ■ 2007～2009年度 中学校 いじめ加害経験率 | 22 |
| ■ 2007年度 小学校4年生 いじめ被害経験率推移 | 24 |
| ■ 2007年度 小学校4年生 いじめ加害経験率推移 | 26 |
| ■ 2007年度 中学校1年生 いじめ被害経験率推移 | 28 |
| ■ 2007年度 中学校1年生 いじめ加害経験率推移 | 30 |
| ■再録 2004年度 小学校4年生 いじめ被害経験率推移 | 32 |
| ■再録 2004年度 小学校4年生 いじめ加害経験率推移 | 34 |

はじめに

文部科学省が毎年行っている『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』（いわゆる『問題行動調査』）によれば、平成 20 年度のいじめの認知件数は 84,648 件と、前年度の 101,097 件と比べて 16,449 件の減少となっています。しかし、依然として憂慮すべき状態にあることに変わりはありません。また、いじめの多くが大人の目には「見えにくい」形で行われており、十分な形で認知できているかどうかについても、常に問い直しが求められていると言えます。文部科学省の調査に関しても、「アンケートや個別面談を実施」することが強調されるなど、適切な方法で実態を把握する努力を求めているのはそのためです。

いじめの学術研究において、そうした特徴を持ついじめの実態把握に最も適した方法とされているのが、自記式の質問紙調査です。教師や他の子どもからの報告やインタビュー、観察等に基づく方法よりも客観性や比較可能性等の点で優れているとの理由から、子ども自らが回答する形式のアンケート調査が広く用いられてきたのです。その自記式質問紙調査法により、いじめやそれに関連する要因について定点観測的に行われてきたのが、国立教育政策研究所の『いじめ追跡調査』です。組織改編前の国立教育研究所時代（1998 年）から現在に至るまで、その時々々の修正を加えつつも調査内容の比較可能性を維持し、12 年間にわたって行われてきました。

この調査の特長は、単に同じ内容の調査を繰り返すというにとどまらず、匿名性を維持しつつ、個人を特定して追跡できるよう設計されている点にあります。数量的な変化を経年的に追うだけではなく、児童生徒の発達や変容の過程を追えるようにすることで、いじめに関して語られることの多い言説の真偽を検証できるように考えられているのです。また、同時に、日本全体の状況を推測する際の根拠となるデータの収集・蓄積という条件をも満たすため、大都市近郊にあり、住宅地や商業地のみならず、農地等も域内に抱える地方都市を代表的な地点として選んだうえで、市内の全小中学校（計 19 校）に在籍する児童生徒全員（小学校 4 年生以上）を対象としたコホート（同時出生集団）調査という形をとっています。これにより、1 回限りの全国調査や対象数の限られた事例的な追跡調査では得られない、質の高いデータを収集することに成功しています。12 年間の継続調査の結果が安定していることは、その質の高さを示すものとも言えるでしょう。

この追跡調査のうち、1998～2003 年にかけて行われた 6 年間分の結果については、国立教育政策研究所と文部科学省の共催による「平成 17 年度教育改革国際シンポジウム」において報告され、その内容は国立教育政策研究所／文部科学省編『平成 17 年度教育改革国際シンポジウム「子どもを問題行動に向かわせないために ―いじめに関する追跡調査と国際比較を踏まえて―」（報告書）』（平成 18 年）に収録されています。また、それに引き続き行われた調査の中から、2004～2006 年の 3 年間の結果については、学校現場等で役立つ知見の形でまとめ、『いじめ追跡調査 2004-2006 Q&A』（平成 21 年）として刊行しています。両報告書は、共に本センターの HP よりダウンロードでき、学校現場での実践や研究に役立てられるようになっています。

本冊子は、その続編として、2007～2009 年の 3 年間分のデータを中心に分析を行うとともに、必要に応じて 2004～2009 年の 6 年間分の分析を行うことで、最新の結果をより確かな形で示すようにしたものです。本冊子をお読みいただくことにより、皆さんのいじめに対する認識が深まり、それぞれの取組が一層進んでいくことを願っています。

平成 22 年 6 月

国立教育政策研究所生徒指導研究センター

本冊子について

○本冊子の目的

いじめのような問題（第三者には「見えにくい」問題）について、その実態や発生メカニズムを明らかにしようとする際には、児童生徒に対する何らかの調査が不可欠です。また、調査を実施する場合でも、1回限りで終わる単発の調査結果を安易に一般化することには危険が伴いますから、同一対象に対して複数回の調査を繰り返すこと、定期的に調査を行うことも必要になります。しかも、複数回の結果をただ並列するだけでは、傾向は明らかになっても、その奥にある変容過程までは明らかになりません。したがって、詳細な分析を行うためには、個人を特定できる形で追跡的に調査を行うことも必要になってきます。

ところが、いじめのようにデリケートな問題を、上に述べたような理想的な形で、とりわけ個人を特定できる形で各学校が実施しようすると、児童生徒が本当のことを答えない可能性が考えられます（被害経験を答えることによって更にいじめがエスカレートすることを恐れる、加害経験を答えることによってしっ責されることを恐れる等のため）。

国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは、そのような各学校現場が直接に収集することが困難なデータを各学校や教育委員会等に代わって収集・蓄積するため、いじめの追跡調査を継続的に行っています。本冊子は、そうした調査の中から、2007～2009年の3年間、計6回にわたる結果をまとめ、広く活用していただけるようにしたものです。

○本冊子の構成

6回にわたる膨大なデータをただ羅列しただけでは、そこから何が明らかになっているのかが分かりにくいことでしょう。そこで、本冊子では、前半と後半の2部構成とし、追跡調査ならではの分析から得られる知見によって、いじめに関する「正しい認識」を獲得していただけるように配慮しました。

まず、前半部分では、いじめに関する素朴な疑問に答える「Q&A形式」を採ることになりました。3年間分のデータを再集計したり図示したりして、いじめの実態をより具体的かつ正確に把握してもらえるように配慮しました。既に発行済みの『いじめ追跡調査 2004 - 2006 Q&A』で議論された内容については単なる繰り返しを避け、その議論の概要と共に新たなデータが付け加わることで何が分かったのかを示すという形にしています。

後半部分には、この調査がどのように行われたのかをまとめた概要と、調査結果の単純集計結果（いじめに関する項目のみ）を収録しました。2007年度から2009年度までの3年間に、いじめの経験率にどのような変化があったのかを小学校と中学校を分けて見られるように、いじめの種類ごとに毎回の調査結果を男女別の構成比（棒グラフ）で示してあります。また、小学校の4年生から6年生、中学校の1年生から3年生という学年進行に伴い、いじめの経験率にどのような変化が現れるのかについてもご覧いただけるようになっていきます。こちらについては、『いじめ追跡調査 2004 - 2006 Q&A』から一部のデータを再録し、2004～2009年までの6年間分のデータ、小学校4年生から中学校3年生に至るまでの学年進行を見ていただけるようになっていきます。

※単純集計結果の表示は、以下のような色分けになっています。後半部分のグラフだけでなく、前半部分で示されているものについても同じ色分けになっていますので、各年度ごとの集計なのか、特定の学年の集計なのかが一目で分かります。

- ・各年度ごとに、小学校の4～6年生までの3学年分を集計したものと、中学校の1～3年生までの3学年分を集計したもの

→薄青色のグラフ

- ・2007年度の小学校4年生が6年生になるまでの3年間の変容と、2007年度の中学校1年生が3年生になるまでの3年間の変容、さらに2007年度の中学校1年生が小学生であった2004年から2006年までの3年間（小学校4年生から6年生になるまで）の変容を示したもの

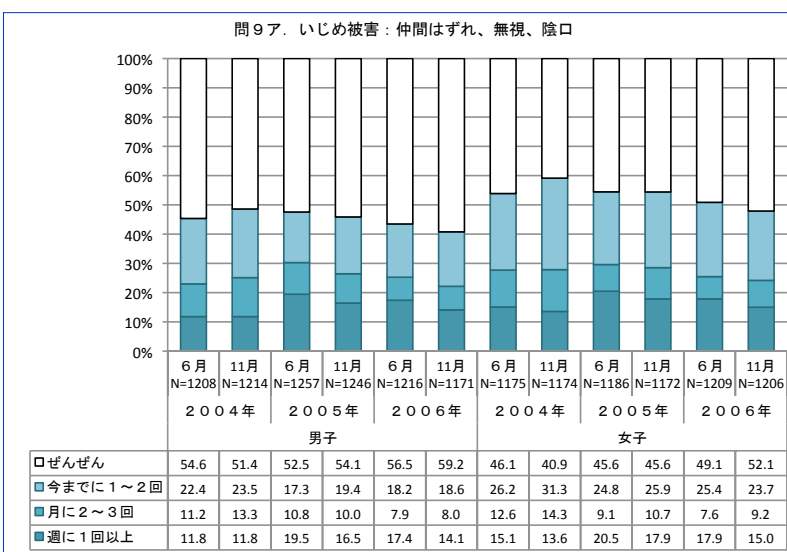
→オレンジ色のグラフ

■やはり、いじめにピークはないのか？

『いじめ追跡調査 2004 - 2006 Q&A』では、2004～2006年度のデータに基づき、2006年秋のいじめの社会問題化を「いじめの第3のピーク」と表現することが適切でないことを指摘しています。今回のデータからも、同じようなことが言えるのでしょうか。

今回の追跡調査（2007～2009年度）の結果も、前回の追跡調査（2004～2006年度）と同様、いじめにピークがあったとは考えにくいことを示しています。データから見る限り、いじめは常に起こりうるものであり、一時的に増加したり減少したりするものではないことがわかります。2006年秋は、いじめが日本において社会問題化した3回目であることは確かですが、それをピークと呼ぶことは、いじめの発生に対して誤ったイメージを付与することに他なりません。

下に示した二つのグラフは、いずれも小学校における「仲間はずれ、無視、陰口」の被害経験率の推移を男女別に示したものです。一方（左上）は2004～2006年度の結果で、他方（右下）は2007～2009年度の結果ですが、両者の間に大きな差を見いだすことが困難であることは一目瞭然です。このことだけを考えても、2006年秋を特別視する理由はないことが明らかでしょう。以下、一つずつていねいに見ていきます。



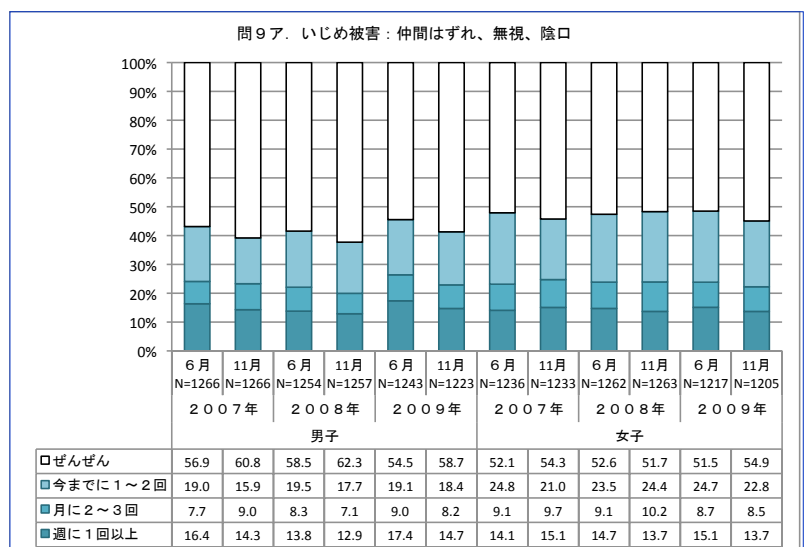
まず、2004年度から2006年度の小学校における「仲間はずれ、無視、陰口」被害経験率からです。左半分が男子、右半分が女子の結果を表しています。

たとえば、「週に1回以上」の経験率に着目すると、男子も女子も2005年夏が最大となっています。しかし、そこに「ピーク」と呼ぶほどの増減が見いだせるわけではありません。

実際、男子の「経験なし」に着目してみると、それが51.4～59.2%という幅の中で増減していること、女子では40.9～52.1%という幅の中で増減していることが読み取れます。

一方、右は同じ内容を2007年度から2009年度で示したものです。左半分の男子の「週に1回以上」の経験率に着目すると、男子では2009年夏が最大、女子では2007年夏と2009年夏が最大となっています。しかし、ここでも「ピーク」と呼ぶほどの変化は見いだせません。

また、「経験なし」に着目してみると、男子では54.5～62.3%という幅に、女子では51.5～54.9%という範囲に入っています。2004～2006年度と比べると、2007～2009年度は被害経験率は若干低くなっていますが、これは1998～2003年度以来の漸減傾向を示しているに過ぎず、2004～2006年度が特別に高かったことを示すものではありません。



これと同様のことは、小学生の加害経験、中学校の被害経験や加害経験においても当てはまります。このページの冒頭で指摘したとおり、いじめは常に起こりうるものであり、「何が流行のようなものがある」とか、「今はピークを過ぎたから大丈夫」とかいった判断をするのは誤りであることがわかります。

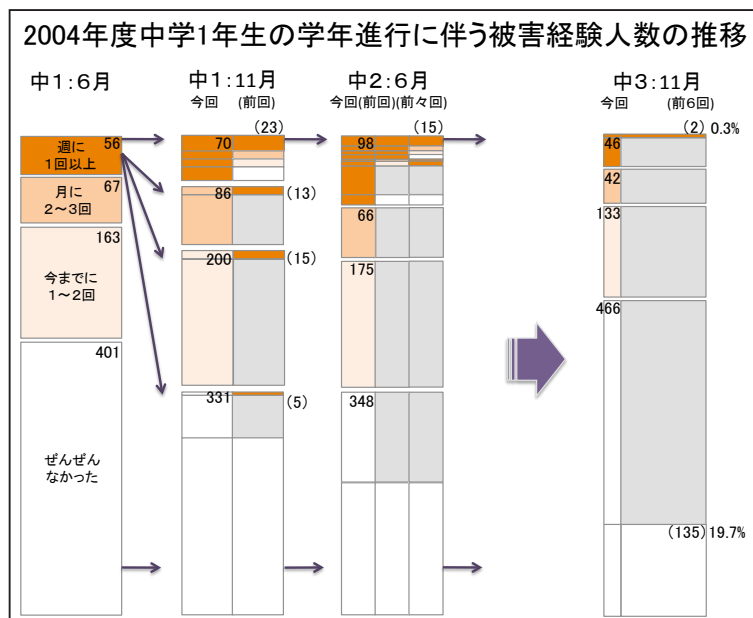
※このページの図は、いずれも「仲間はずれ、無視、陰口」の経験率。

■やはり、どの子どもにも起きうるのか？

Q 『いじめ追跡調査 2004 - 2006 Q&A』では、2004～2006年のデータに基づき、各学校単位で見た場合にも、各学年単位で見た場合にも、いじめが起きやすい学校とそうでない学校、いじめが起きやすい学年とそうでない学年というものが存在しているわけではないことが、さらには、いわゆる「いじめられっ子（いじめられやすい子ども）」や「いじめっ子（いじめやすい子ども）」も存在しないことが示されました。今回も、同じことが言えるのでしょうか？

A 同じことが言えます。いわゆる「荒れた学校」や「問題のある学年」だけでいじめが起きているわけではありませ
ん。 **どんな学校でも、どんな学年でも、いじめは起きうるというのが、正しい事実認識、客観的な事実認識**なのです。
ここでは、特に、「どの子どもにも起こりうる」ことについて、改めてデータを示すことにします。

下に示した図は、『いじめ追跡調査 2004 - 2006 Q&A』の中で、「いじめられやすい子ども」が存在するかどうかを確かめるため、2004年度の中学1年生が中学校の3年間でどのように被害に遭っているのか、「仲間はずれ、無視、陰口」を例に追跡的に示したものです。もし、いわゆる「いじめられっ子」が存在するならば、彼らは毎回の調査で繰り返し被害を訴えていると考えられること、またそうした子どもが存在するならば、恐らくは、「週に1回以上」という高頻度の被害に遭っている可能性も高いという仮説のもと、そうした事実が現れるかどうかを検証したものです。



(単位は「人数」。なお、図中の灰色部分は訳を省略したことを示す。以下、同じ)

※「仲間はずれ、無視、陰口」の経験率。

ところが、この図から分かるとおり、この学年の中で、「週に1回以上」という高頻度の被害経験があると答えた生徒は、毎回50～100名(7～14%)程度存在するにもかかわらず、それが半年後まで続く事例は半分以下でした。まず、1年生時の6月には56名だった高頻度の被害経験者が、その年の11月には70名に増えているにもかかわらず、前回に引き続き高頻度の被害経験があった者は23名にとどまり、残りの33名(=56名-23名)は、「月に2～3回」に減った者が13名、「(新学期になってから)今までに1～2回」が15名、「ぜんぜんなかった」が5名、という具合に変わったのです。ちなみに、2年生時の6月には高頻度の被害経験者はさらに増えて98名にまでなっていますが、やはり前回(1年生時の11月)に引き続きという者は半分以下に減り、前々回(1年生時の6月)から3回とも被害経験があると答えた者は15名でした。そして、4回目(2年生時の11月)と5回目(3年生時の6月)を省略し、3年生時の11月を見ると、6回とも「週に1回以上」の被害経験があった者は2名(0.3%)にとどまるのが分かったのです。

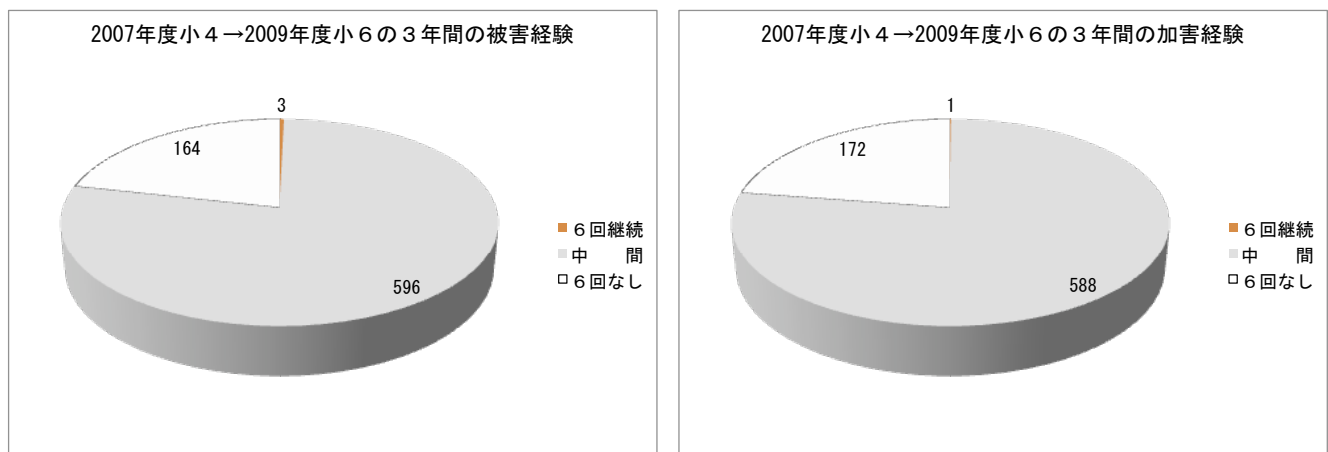
つまり、比率から言えば、毎回「クラスに3～6名」程度の割合の子どもが被害に遭っている計算であるにもかかわらず、常習的な被害者と考えられるのは1000名につき3名という数でした。つまり、「クラスに数名程度」の「気になる子ども」だけが「いつも被害に遭っている」といったイメージとは大きく異なり、被害者は毎回大きく入れ替わっていることが明らかになったのです。反対に「ぜんぜんなかった」と答えた生徒について見た場合にも、当初は401名(58.4%)だったのが、最終的には135名(19.7%)にまで減り、中学校3年間の間に、何の被害経験もなかったのは2割以下、8割以上の生徒は「仲間はずれ、無視、陰口」の被害を、ある時期に何らかの頻度で経験したことが明らかにされました。

以上のことは、加害者について見た場合にも同様で、「週に1回以上」という高頻度の加害経験があると答えた生徒は、毎回35～85名（5～12%）程度いたにもかかわらず、半年後も引き続き経験があると答えた者は半分以下で、最終的に、3年生時の11月まで考えた場合、「週に1回以上」が6回とも継続したのは2名（0.3%）にとどまりました。「ぜんぜんなかった」と答えた生徒も、当初は365名（52.5%）だったのが、3年間の間に減少し続けて130名（18.7%）にまで減り、中学校3年間の間に、8割以上の生徒が「仲間はずれ、無視、陰口」の加害に加わっていることが分かりました。

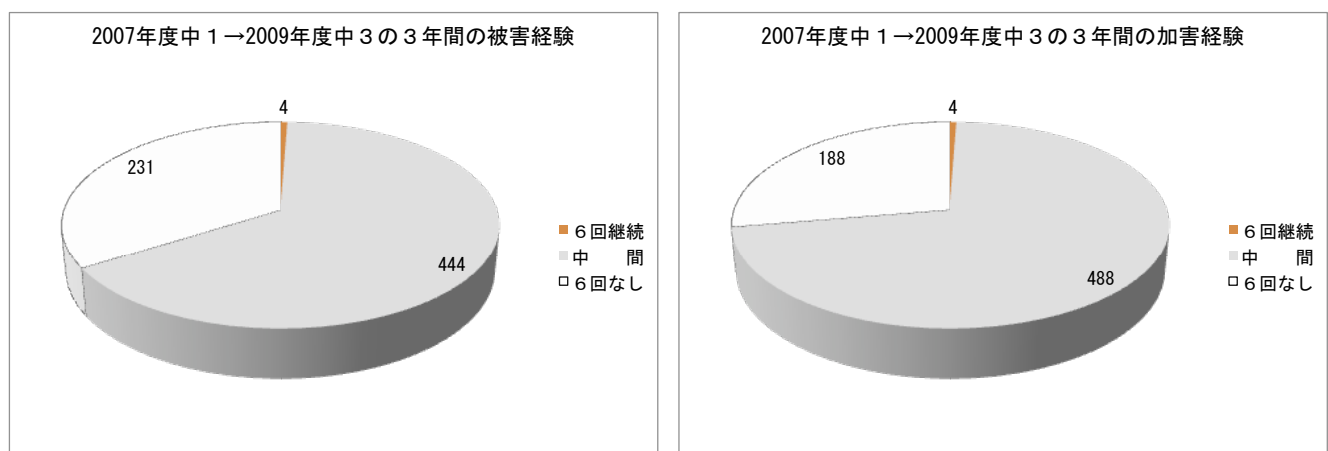
小学校においても、高頻度のいじめ被害・加害を繰り返す特定の子どもはごく一部で、被害者・加害者ともに大きく入れ替わること、そして中学生よりも更に多くの子ども（85%前後）が、どこかの時期に何らかの頻度の被害経験や加害経験を持っていることが示されました。

さて、下に示したのは、今回の2007～2009年データを用いて同様の分析を行った際の、最終結果のみを図示したものです。すなわち、「仲間はずれ、無視、陰口」のいじめに関して、3年間の6回にわたる調査の中で、「週に1回以上」という高頻度のいじめ経験が6回とも継続した者と、「ぜんぜんなかった」が6回とも継続した者、そしてそれ以外の者（どこかの時期に何らかの頻度の経験があった者）の人数を示したものです。

まず、小学校について見てみると、被害経験が3年間、6回にわたって継続した者は3名（0.4%）、全く経験がなかった者は164名（21.5%）でした（下左）。また、加害経験が3年間、6回にわたって継続した者は1名（0.1%）、全く経験がなかった者は172名（22.6%）でした（下右）。



次に、中学校について見てみると、被害経験が3年間、6回にわたって継続した者は4名（0.6%）、全く経験がなかった者は231名（34.0%）でした（下左）。また、加害経験が3年間、6回にわたって継続した者は同じく4名（0.6%）、全く経験がなかった者は188名（27.6%）でした（下右）。



以上のことから明らかなおり、2007～2009年データからも、「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる」（平成8年、文部大臣〔当時〕緊急アピール）ことが分かります。

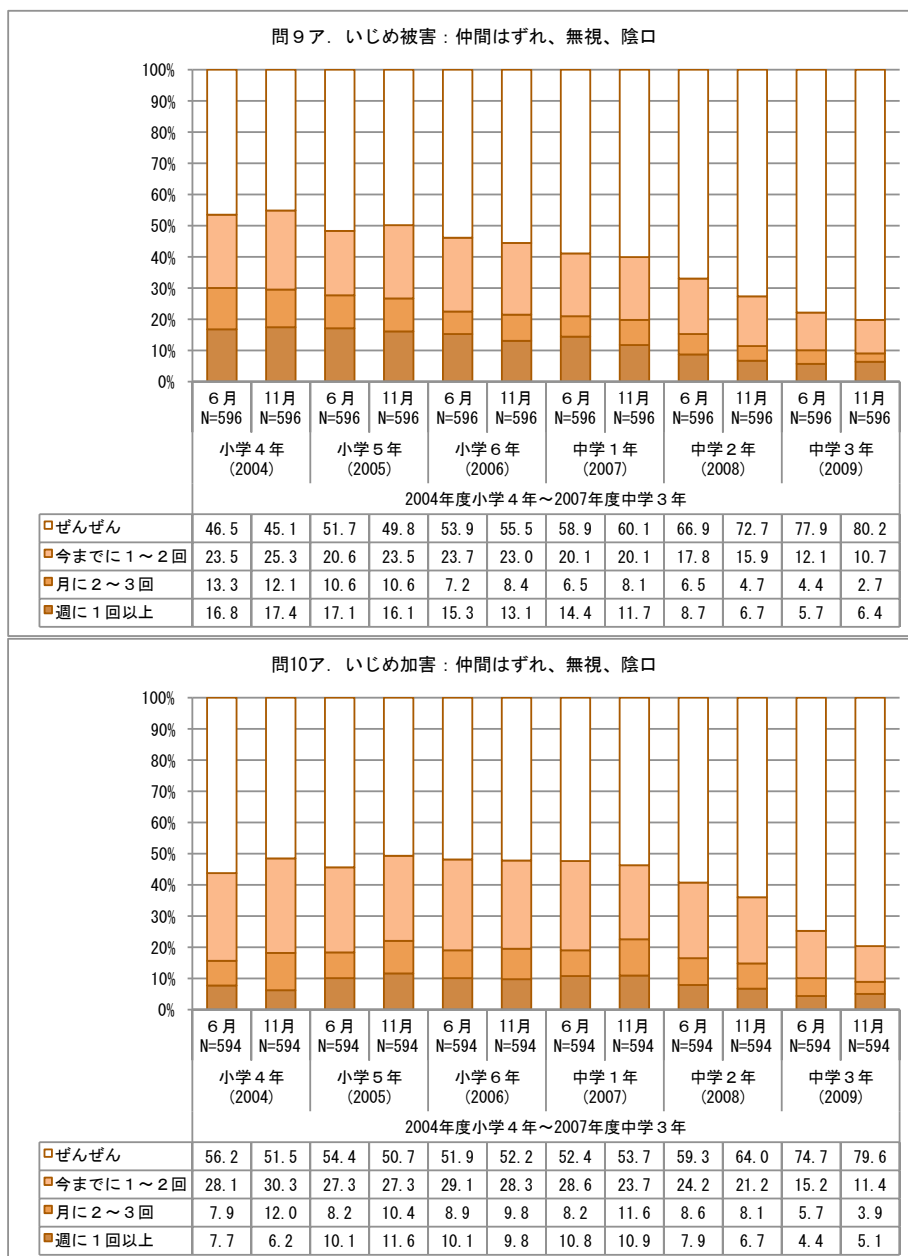
※この頁の図は、いずれも「仲間はずれ、無視、陰口」の経験率。

6年間の追跡で、何が分かったのか？

Q ネットいじめ等も含んだ新しい調査票に変わった2004年から、6年間分のデータが蓄積されたと聞きます。6年間分を通して眺めたときに、どのようなことが分かりましたか？

A 2009年度の調査を完了したことで、2004年度の小学4年生が中学校3年生となって卒業するまでのちょうど6年間の結果を通して分析することができるようになりました。すなわち、児童生徒の成長発達に伴っていじめがどのように変化していくのか、いじめの被害者や加害者がどのように入れ替わるのかを、データによって確認できるようになったのです。既に、1998年から2003年までのデータを用いて同様の分析結果が示されていますが（国立教育政策研究所／文部科学省編『平成17年度教育改革国際シンポジウム「子どもを問題行動に向かわせないために ―いじめに関する追跡調査と国際比較を踏まえて―」（報告書）』平成18年）、改めて最新のいじめ事情をお示しすることにします。

下の図は、2004年度の小学4年生の学年コホートの「仲間はずれ、無視、陰口」の被害経験と加害経験を、男女の合計で示したものです。これを見ると、**被害経験は小学校4年生から中学校3年生に向かってゆるやかに減少していくのに対し、加害経験は小学校5年生から中学校1年生くらいまでがピークとなり、その後、減少していくことがわかります。**ただし、年度（学年コホート）が違うとそうしたピークが中学校2年生にまでずれ込むことがあります。また、いじめの種類によっ

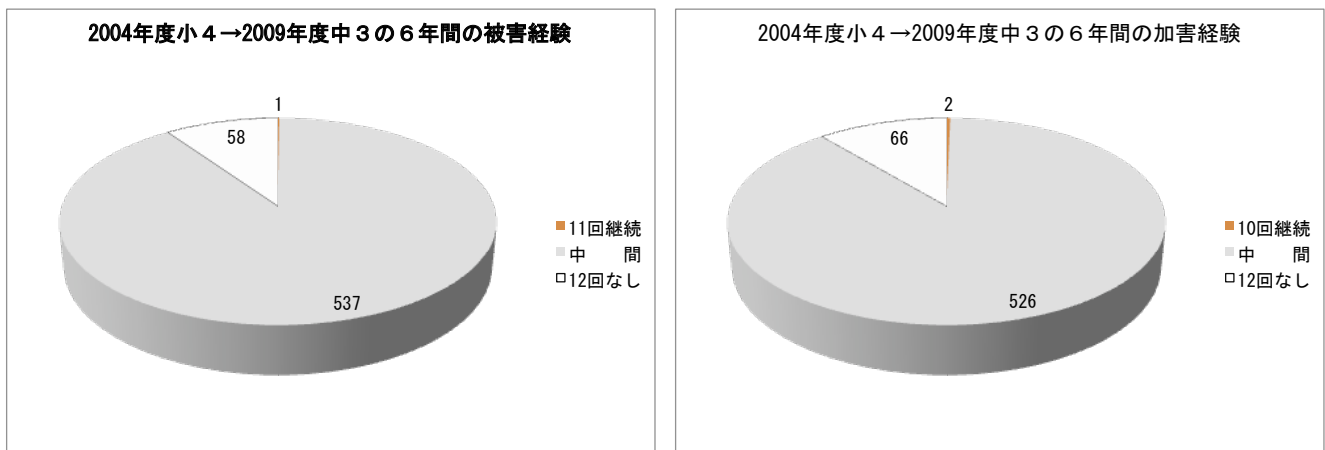


※「仲間はずれ、無視、陰口」の経験率。

ても、そうしたピークに差が出てきます。たとえば、「パソコンや携帯電話で」といういじめなどは、必ずしも小学校で多くはないことが容易に想像できることでしょう。

さて、そうした増減傾向の中でも、中学校2年生や3年生を除けば、どの学年においても4割以上の児童生徒がいじめを経験しています。その際、いじめに関わっている児童生徒が特定の（言わば「常習的な」）児童生徒であるのか、それとも大きく入れ替わっているのかは、改めて指摘するまでもないでしょう。もちろん、毎回、大きく入れ替わっています。

下の図は、「仲間はずれ、無視、陰口」のいじめに関して、6年間、12回にわたる調査の中で、「週に1回以上」という高頻度のいじめ経験が継続した者と、「ぜんぜんなかった」が継続した者、そしてそれ以外の者（どこかの時期に何らかの頻度の経験がある者）の人数を示したものです。まず、左の被害経験ですが、12回に渡って被害が継続した者は0名で、実際にいたのは11回継続した1名(0.2%)でした。そして、その12回とも経験がなかった者は58名(9.7%)でした(下左)。また、右の加害経験でも、12回に渡って加害が継続した者、11回に渡って被害が継続した者はともに0名、実際にいたのは10回継続した2名(0.3%)でした。そして、12回とも経験がなかった者は66名(11.1%)でした(下右)。



つまり、**小学校4年生から中学校3年生までの6年間の間に、いじめと無関係でいられる児童生徒は1割しかいない**ということがわかります。何度も繰り返しますが、「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる」ことを事実として受けとめることが大切であり、事後的に対応するという発想から、いじめが起きにくい学級や学校を作るという未然防止に向かう必要があります。

その場合、個別の児童生徒を念頭において教育を行うというのではなく、児童生徒全体に対する働きかけを中心にしていく必要があります。なぜなら、その時点でいじめに巻き込まれている児童生徒だけが問題と考えるのではなく、どの児童生徒もいじめに巻き込まれる、今は関係なくともいずれは巻き込まれる、と考えて教育を行うことが、本当の意味での未然防止だからです。

「いじめを起こしそうな児童生徒」を特定して個別対応をする、「いじめのサインを見逃さないで早期に発見」して対応する等は、未然防止のようにも見えますが、実は個人の問題や特定の問題の解決を主目的とする対症療法の発想です。そこから抜け出さない限り、未然防止のつもりでも事後対応の域を出ることはないことを自覚することが大切です。もちろん、言うまでもないことですが、このことはいじめが起きてしまった後にしっかりと個別対応を行うことを否定するものではありません。未然防止のための取組と事後対応のための取組を明確に区別したうえで取り組むことが、それぞれの目的を達成することにつながっていくのです。

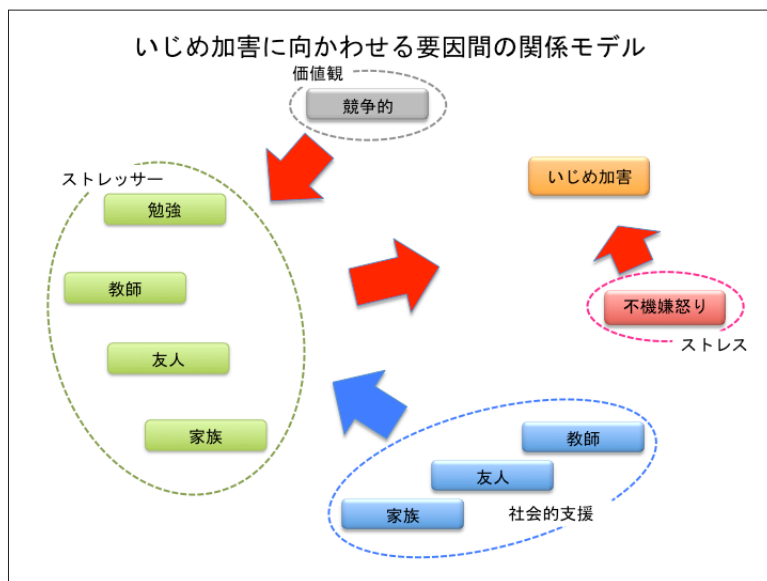
※この頁の図は、いずれも「仲間はずれ、無視、陰口」の経験率。

■いじめに向かわせる要因は、何か？

Q 『いじめ追跡調査 2004 - 2006 Q&A』では、相関係数を手がかりに、いじめの未然防止に有効な対策は、①ストレスの原因となるストレスを減らすこと、②ストレスがあっても行為に及ばないようにハードルを高くする（規範意識を高める）こと、の二通りが中心になるであろうことを指摘しています。その後、新しい知見は得られましたか？

A 誰もがいじめに巻き込まれるということは、家庭環境や個人的な資質に問題があるかどうかとは必ずしも関係なく、その時々で状況でいじめが起きていることを意味します。そこで、前回の小冊子では、加害行為と関連の深い要因として、ストレスやストレス（ストレスをもたらす要因）の存在を指摘してきました。

今回は、その議論を一步進める形で分析を行った結果を紹介합니다。まず、いじめの加害経験と関連の深い（相関係数の大きい）要因を選び出し、それらの要因間に想定される影響の道筋（パス）を仮定します。今回の調査では、ストレスやストレスがいじめにつながるという先行研究を踏まえ、下の図に示したようないじめ発生のメカニズムを想定した調査票が使われています（これを、いじめ-ストレスモデルと呼んでいます）。調査によって実際に得られたデータをこのモデルにあてはめてデータ処理（共分散構造分析）を行い、要因間の関係の強さを見たのが右頁です。



※赤色の矢印は対照となる事象を促進するように働くことを、青の矢印は抑制するように働くことを、それぞれに示している。
※各要因を測定する尺度（調査項目）は下の表の通り。

○尺度と調査票の質問項目

〈いじめ加害の尺度〉

- ・仲間はずれにしたり、無視したり、陰で悪口を言ったりした
- ・からかったり、悪口やおどし文句、イヤなことを言ったりした
- ・軽くぶつかったり、遊ぶふりをして、叩いたり、蹴ったりした

〈ストレスの尺度〉

- （不機嫌怒り）
- ・いらいらする
- ・ふきげんで、おこりっぽい
- ・だれかに、怒りをぶつけたい

〈ストレス要因（ストレスの原因）の尺度〉

- （勉強）
- ・授業中、わからない問題をあてられた
- ・授業が、よくわからなかった
- ・テストが返ってきて、点数が悪かった
- （教師）
- ・先生が、よくわけを聞いてくれずに、おこった
- ・先生が、相手にしてくれなかった
- ・先生が、えこひいきをした
- （友人）
- ・勉強のことで、友だちからからかわれたり、ばかにされたりした
- ・顔やスタイルのことで、友だちからからかわれたり、ばかにされたりした
- ・自分のしたことで、友だちから悪口を言われた

（家族）

- ・家の人が、成績や勉強のことをうるさく言った
- ・家の人が、友人関係や生活面のことをうるさく言った
- ・家の人の期待は大きすぎると感じた

〈社会的支援の尺度〉

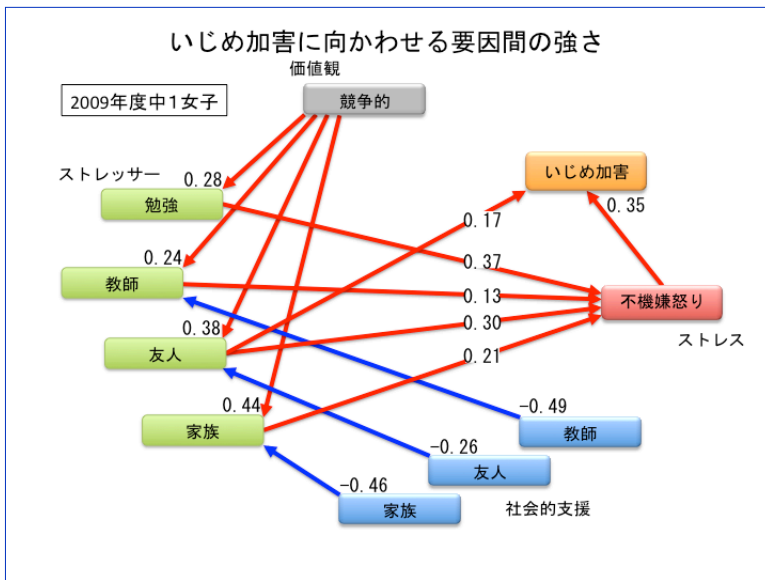
（教師から）

- ・もし、あなたに元気がないと、すぐに気づいてはげましてくれる
- ・もし、あなたが、悩みや不満を言っても、イヤな顔をしないで聞いてくれる
- ・ふだんから、あなたの気持ちを、よくわかろうとしてくれる
- （友人から）
- ・もし、あなたに元気がないと、すぐに気づいてはげましてくれる
- ・もし、あなたが、悩みや不満を言っても、イヤな顔をしないで聞いてくれる
- ・ふだんから、あなたの気持ちを、よくわかろうとしてくれる
- （家族から）
- ・もし、あなたに元気がないと、すぐに気づいてはげましてくれる
- ・もし、あなたが、悩みや不満を言っても、イヤな顔をしないで聞いてくれる
- ・ふだんから、あなたの気持ちを、よくわかろうとしてくれる

〈価値観の尺度〉

（競争的）

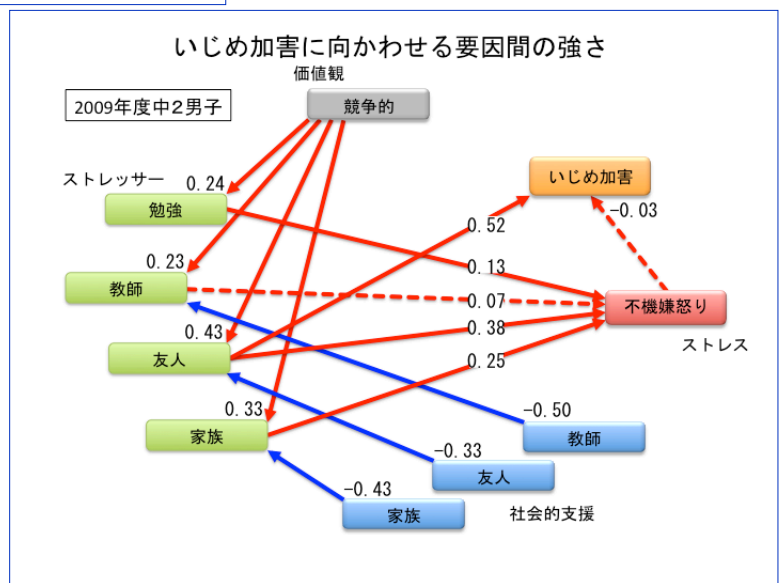
- ・これからの世の中では、勉強の成績が悪いとみじめだ
- ・これからの世の中では、顔やスタイルがよくないとみじめだ
- ・これからの世の中では、人よりも得意なことがないとみじめだ



たとえば、2009年度の中学1年生の場合、左の図のような結果が得られました。まず、「競争的価値観」が強いほど、「勉強ストレス」「教師ストレス」「友人ストレス」「家族ストレス」を感じやすくなり、他方で「教師からの支援」「友人からの支援」「家族からの支援」が強いほど、それぞれのストレスを感じにくくなる。そして、こうした様々なストレスが「不機嫌怒りストレス」を経由して、「いじめ加害」に結びつく。さらに、「友人ストレス」は、直接にも「いじめ加害」に向かわせる働きをする — という道筋が想定できます。

それに対して、同じ2009年度の中学校2年生

の男子の場合、やや異なる道筋が示されています(右図)。「競争的価値観」が強いほど、ストレスを感じやすくなり、他方で「教師からの支援」「友人からの支援」「家族からの支援」が強いほど感じにくくなる。そして、ストレスが強いほど、「不機嫌怒りストレス」を高める — ここまでは同じです。ただし、「教師ストレス」の「不機嫌怒りストレス」に対する影響は、必ずしも強くはない(統計的に有意ではない)し、「不機嫌怒りストレス」も「いじめ加害」に影響を及ぼしません(共に、破線で表示)。「いじめ加害」に結びつくのは、もっぱら「友人ストレス」であり、他のストレスは無関係と考えられます。



2007～2009年度の小学校4年生～中学校3年生までの男子と女子、計36組(3年間×6学年×2種類)にどのような道筋が確認できるかを調べてみると、36組のうち、①23組は各種ストレスが「不機嫌怒りストレス」経由で間接的に、さらに「友人ストレス」は直接的にも、「いじめ加害」に影響を及ぼしており(左上の図のタイプ)、②13組は「友人ストレス」だけが「いじめ加害」に直接に影響を及ぼしている(右下の図のタイプ)、ということが分かりました。ちなみに、すべてのストレスが必ず「不機嫌怒りストレス」に影響するわけではなく、36組中25組では「教師ストレス」、12組では「勉強ストレス」、6組では「家族ストレス」、2組では「友人ストレス」(以上、重複あり)が影響を及ぼしていませんでした。つまり、「いじめ加害」に向かわせる要因はある程度まで特定されているものの、実際にどの要因が強く働くかは時々の状況によって異なり、そこに学年進行や男女差等による一貫した傾向は見られません。

ただ、「いじめ加害」に対する影響には、直接的なものだけでなく、間接的なものもあります。たとえば、「競争的価値観」は、直接には「いじめ加害」に影響を及ぼしませんが、各種ストレスを高めることで「不機嫌怒りストレス」や「いじめ加害」に間接的に影響を及ぼしていることに注意すべきです。直接的な影響(直接効果)と間接的な影響(間接効果)の合計を総効果と呼びますが、この総効果を順位で比較することで、何が影響力を持っているかを判定してみましょう。

まず、最も影響を与えていると考えられるのは「友人ストレス」です。36組中31組で第1位、5組で第2位の影響力を持っており、直接的にも間接的にも影響力が大きい要因です。次に、「競争的価値観」です。間接効果しかないにもかかわらず、36組中2組で第1位、19組で第2位、15組で第3位の影響力を示しています。そして、様々なストレスの影響を受ける位置にある「不機嫌怒りストレス」は、36組中3組で第1位、11組で第2位、14組で第3位あることが分かります。どうやら、この3つの要因がいじめの未然防止の鍵と言えそうです。

■いじめを、どう減らしていくのか？

Q これまでに分かったことを総合的に考えると、いじめを減らしていくためには、どのようなことが必要になると言えるのでしょうか？

A 結論から言えば、いじめを減らすにはいじめを予防する（未然防止に取り組む）しかない、ということになるでしょう。そのために具体的にどのようにしていくのかについては、別冊子（『問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方』）をご覧くださいととして、ここでは、なぜそのような結論になるのかを説明していきましょう。

（1）いじめの発生状況に対する正しい認識

まず、最初に押さえておくべきことは、**いじめの被害にしても加害にしても、一部の特別な児童生徒だけが関わっているわけではない**、という事実です。本冊子で紹介した調査では、新しい学年になってからの3ヵ月あまり、あるいは夏休みが明けてからの3ヵ月あまりの間に経験した、いじめ被害といじめ加害について尋ねています。そうしたデータを見ていくと、被害や加害に巻き込まれる児童生徒がいかに頻繁に入れ替わっているのかがよくわかります。これは既に6～7頁で示したとおりですが、そのことを学校や学級をイメージして具体的に理解してもらうため、別の集計結果を示しておきましょう。

たとえば、2007年度の中学1年生のうち、6月に「仲間はずれ、無視、陰口」の「週に1回以上」の被害経験があると答えた生徒は115名（14.9%）、被害の頻度を広げて「週に1回以上」だけでなく、「月に2～3回」「今までに1～2回」も加えた時に被害経験があると答えた生徒は320名（41.3%）でした。同様に、11月に「週に1回以上」の被害経験があると答えた生徒は100名（12.9%）、被害の頻度を広げて「今までに1～2回」以上の被害経験があると答えた生徒は316名（40.8%）でした。この2時点では、ほぼ似たような頻度で被害経験があったことが分かります。ちなみに、こうした傾向は、中学校3年生でやや経験率が下がることを除けば、どの年度のどの学年でも概ね似たようなものと考えて構いません。

ところが、「週に1回以上」の被害経験がこの2時点間で継続していた生徒は38名に過ぎません。つまり、6月時の115名の3分の1程度にまで減る（3分の2程度は入れ替わる）のです。また、「今までに1～2回」以上の被害経験へと範囲を広げた場合にも、被害経験が2時点間で継続していた生徒は210名です。つまり、6月時の320名の3分の2程度に減る（3分の1程度が入れ替わる）ことが分かります。

同様に加害経験を見た場合、6月に「週に1回以上」の加害経験があると答えた生徒は86名（11.1%）、頻度を広げて「今までに1～2回」以上の加害経験を訴えたのは367名（47.2%）で、11月に「週に1回以上」の加害経験があると答えた生徒は91名（11.7%）、加害の頻度を広げて「今までに1～2回」以上の加害経験があると答えた生徒は368名（47.3%）でした。こちらも、似たような頻度で加害経験があったことになりませんが、「週に1回以上」の加害経験が続いた生徒は32名で6月時の86名の3分の1程度に減り（3分の2程度は入れ替わる）、「今までに1～2回」以上の被害経験が続いた生徒は247名で6月時の367名の3分の2程度に減る（3分の1程度が入れ替わる）ことが分かります。

つまり、小学校4年生から中学校2年生くらいまでのいじめは、被害にしても加害にしても、「週に1回以上」の高頻度の場合には40人学級換算でそれぞれ4～6人の経験者がいるにもかかわらず、そのうち3～4人は5～6ヵ月で新たな経験者に入れ替わり、「今までに1～2回」以上の場合には16人以上の経験者がいるにもかかわらず、そのうち5～6人は5～6ヵ月で新たな経験者に入れ替わる（のべでは20人以上になる）のです。決して一部の「常習的な」児童生徒だけが繰り返している問題ではないのですから、一部の「気になる子ども」だけに一生懸命に関わっていれば解決していくといったことにはなりません。また、事後対応をいくら徹底しても、新たな児童生徒が次々に被害者になり加害者になる状況が放置されている限り、状況は変わりません。**いじめを減らすには未然防止の取組が不可欠**というのは、至極当然の結論なのです。

（2）いじめ発生のメカニズムをふまえた対策

児童生徒をいじめ加害に向かわせる要因として大きいのは、「友人ストレス」「競争的価値観」「不機嫌怒りストレス」の3つであることが示されました。それらの要因が高まると、いじめ加害に向かいやすくなる（リスクが高くなる）ことは確かでしょう。しかし、そうしたリスク要因から実際にいじめ加害という行動に移るためには、偶発的な要因が必要になります。『いじめ追跡調査 2004 - 2006 Q&A』の10～11頁でも触れたとおり、**いくらストレスが高くても、それを発散した**

いと感じたとしても、適当な相手（自分が勝てそうで、都合の良い口実・きっかけがある等）と、適当な方法（自分にとっては簡単で、大人に見つかりにくく、見つかったも言い逃れができそう等）がなければ、加害行為に及ぶわけにはいかないからです。とは言え、先の3つの要因を改善することが発生リスクを減らすことは間違いありません。以下に、そのポイントを示します。

①競争意識

「競争」自体がいけないというわけではないことは、言うまでもないでしょう。互いに競い合うことによって互いに高め合うこと、よりよいものを目指すことができることは間違いありません。しかし、一方で、競争に伴う弊害があることも、認めないわけにはいかないでしょう。特に「勝ち負け」という結果のみが強調されすぎること、児童生徒の緊張や不安感、いらだちなどが高まったり、負けた場合に無気力になりやすいこと等は、容易に想像できるでしょう。また、ルールが曖昧で不公正・不公平な場合にも、いらだちや無気力感が高まります。さらには、そうしたことが、「勝つ」という目的のためには手段を選ばない、相手の失敗や負けを期待する、という考え方や態度に結びつくこともあります。

「競争の価値観」がいじめ加害のリスク要因になるのはそうした理由からであろうことを考えれば、学校や家庭の指導の在り方を見直す必要があることが分かるはずです。**児童生徒に頑張らせたり励ましたりする際に、いたずらに「勝ち負け」を強調したり、相手をおとしめたりするような表現を用いたりすることを避ける**ことが、いじめを生みにくい土壌をつくることにつながることに気いてください。

②友人ストレスと友人からの支援

子ども同士のトラブルを減らし、好ましい人間関係を作っていくことが大切であることは、今さら言うまでもないでしょう。ここで注目すべきことは、今の児童生徒の集団体験（生活体験や社会体験）の貧しさです。暗に特定の児童生徒の問題を想定して知識やスキルの改善を図るといった「治療的な発想」にとどまることなく、全ての児童生徒に対して基礎的な体験を提供するという「教育的な発想」に立ち、日々の授業をはじめとする学校生活のあらゆる場面において他者と関わる機会を工夫していくことが必要です。小手先の知識やスキルの提供だけで事態を変えることは困難だからです。

トラブルが起きることも含めて集団というものを受け入れること、その中でトラブルを回避するために自分はどうすべきかに気づくこと、また集団内の他者から認められる喜びに気づくこと、最終的には自ら進んで他者や集団に貢献することが誇りになること — そうした教育活動が確実に行われていくことが、いじめを防止することになるのです。体験が乏しくなっている児童生徒に対して疑似体験で対処するだけでは、いじめは解消していきません。ちなみに10～11頁で示したモデルの分析において、「友人からの支援」は36組中の1組で第2位、7組で第3位、12組で第4位の影響力を持つことが分かっています。日々の豊かな人間関係の構築は、確かにいじめを減らすことにつながるのです。

③不機嫌怒りストレス

ストレスが高いなら、それへの対処法を教えればよいのでは、と考える方もいることでしょう。確かに、大人の場合であれば、そうした考え方も正しい選択肢の一つと言えるでしょう。なぜなら、ストレス自体を避け得ない状況下で働く必要があったり、既に人格も完成段階にあるからです。しかし、成長発達の途上にあり、人格形成のさなかにある児童生徒に対しては、**ストレスへの対処法を教える以前に、いたずらにストレスが生じないような工夫、つまりストレスの軽減や、社会的支援の拡充を考えていくべきではないでしょうか。**その意味でも、上の「②」で述べた集団活動の充実は大きなポイントになってくるでしょう。

(3) いじめ対策を進める前段階として

いじめの未然防止を考えるうえで注意すべきなのは、「いじめが起きれば気がつくはず」「平日頃から良く言い聞かせているから大丈夫」等の教師や親の慢心です。子どもの訴えや不審な行動に対して、誰か一人が軽い気持ちで甘い対応をすることが、いじめを見過ごしたり、大人への信頼を失わせたりして、最悪の場合には痛ましい事件が起きることにもなりかねません。これを避けるには、教師全員がいじめに対する甘い考えを捨て、学校全体として取り組む姿勢を堅持し続けることが大切です。そうした教師の意識改革、共通認識づくりには、昨年（平成21年）6月に、当センターが公表した『いじめに関する校内研修ツール』（<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/ijimetool/ijimetool.htm>）を活用してください。

■ ネットを使いたいじめは、増加したか？

Q ところで、携帯電話やパソコンを使った、いわゆる「ネットいじめ」のようなタイプのいじめは、大きく増加しているのでしょうか？

A 幸いなことに被害経験と男子の加害経験は2006年をピークに、女子の加害経験についても2007年をピークに、少し収まってきています。

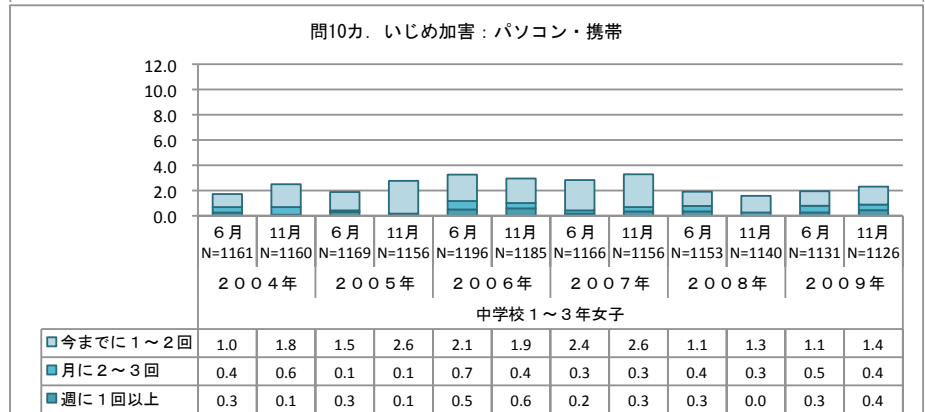
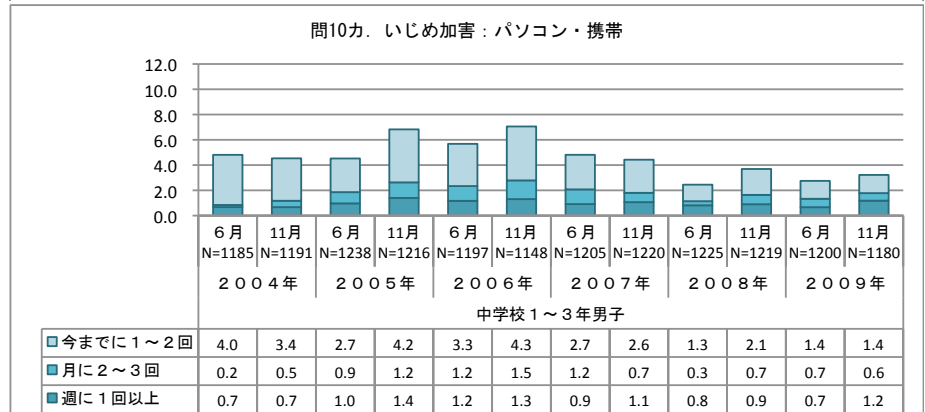
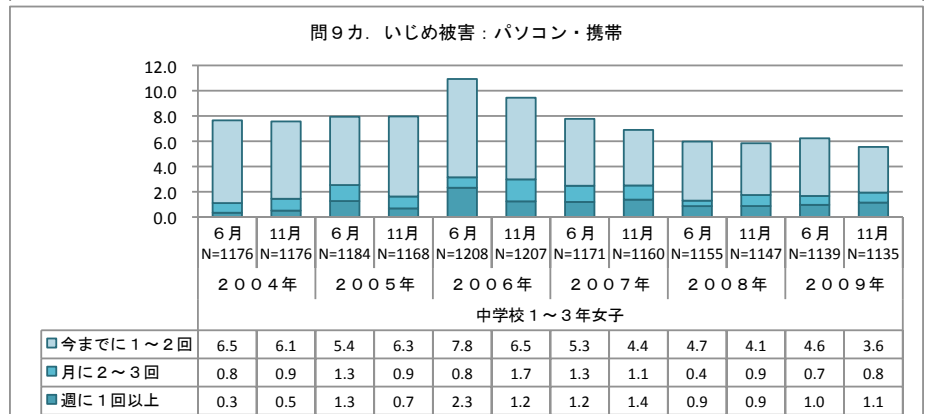
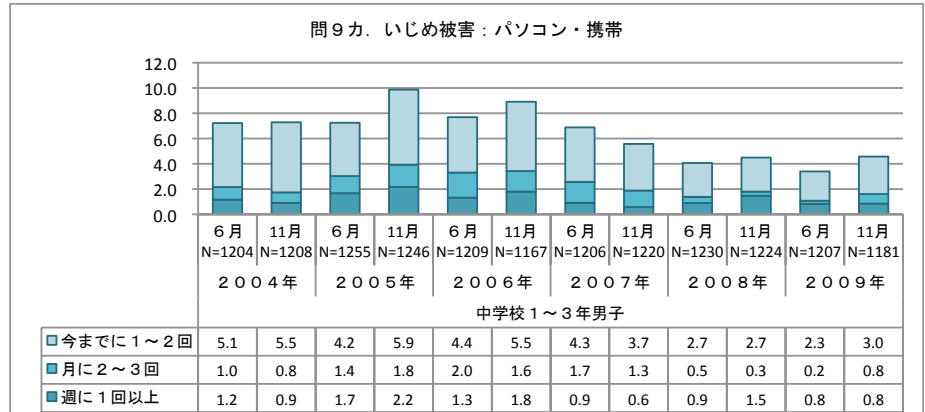
この間、インターネットを経由したいじめ等の問題に対する認識が大人の間にも広まったこと、その結果、携帯電話を持たせないようにする運動が起きたり、児童生徒に対して携帯電話の使い方に関する指導が徹底したり、各地でネットパトロール等の取組が行われるようになったりしたことが、奏効しているものと思われる。

文部科学省においても、2007年の『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』で2006年度の「ネットいじめ」の件数をとりあげたことをはじめ、2008年には『「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集』をまとめるなどの取組が行われ、学校現場に注意を喚起してきた経緯があります。

そうは言っても、完全に収束したというわけではありませんので、依然として注意が必要であることに、変わりはありません。引き続き、児童生徒に対する指導を行っていくとともに、教師や保護者に対する研修や注意喚起が求められています。

たとえば、携帯電話やパソコンだけでなく、ゲーム機からでもインターネットに接続できるようになっており、それとは分かりにくい形でのメールのやりとりや、メッセージの送受信ができるようになってきているからです。

※この頁の図は、いずれも「パソコン・携帯電話で」の経験率。



調査の概要

○調査の時期、サンプル、実施方法

調査の時期

6月末と11月末の年に2回、新学期が始まってから（もしくは、夏休みが明けてから）3ヶ月弱の時期に揃えています。ただし、同一日を指定しているわけではなく、学校間で若干の幅があります。

調査地点・対象校

この調査は、1回限りのものではなく、また単に複数回の調査を繰り返すというものでもありません。匿名性を維持しつつ、個人を特定できる形で数年にわたって（小学校から中学校にかけて）追跡していくことを目的としています。それを可能にするためには、調査単位は中学校区（区内の小中学校すべて）である必要があります。その場合、調査の客観性や代表性を保つ目的で一般に用いられるサンプリング調査の手法を用いたのでは、膨大な数の児童生徒を扱わねばならないこととなります。そこで、日本全体の状況を推測する際の根拠となりうる地点（大都市近郊にあり、住宅地や商業地のみならず、農地等も域内に抱える地方都市）を選び、その市内にあるすべての小学校（13校）と中学校（6校）を対象校としています。

対象児童生徒

小学校4年生から中学校3年生までの全児童生徒が対象です。1学年当たりの児童生徒数は、学年や年度によって異なりますが、概ね800名前後で、大きな変動はありません。また、私立中学校への進学もわずかですので、ほぼ市内全域の児童生徒を網羅していると考えられます。

調査の実施

学級単位で一斉に行います。この調査自体は、個々の児童生徒の変容を追跡できるように記名式で行われていますが、教師や友人の目を意識して回答をためらうことのないよう、調査票の配付時にシール付きの封筒を配付し、回答後は各自で速やかに封入できるような配慮を行い、回答の精度を上げるように配慮されています。ほとんどの児童生徒が小学校4年生の時からの調査を体験済みですので、小学校の高学年以降になっても、この調査票に本当のことを答えても不都合は生じない（叱られたりはしない）という安心感の下に回答していることが期待できます。

質問項目

いじめに関する内容のほか、学校や集団への適応感、ストレス、ストレスをもたらす要因、相談相手の有無等が含まれています。下に示したのは、いじめの被害経験を尋ねる項目です。

○調査票のいじめに関する項目

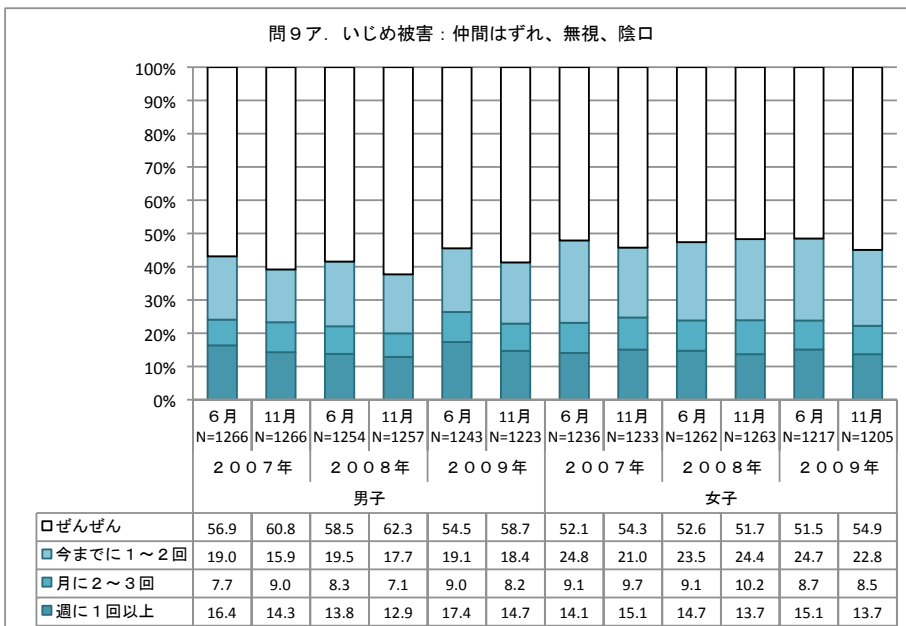
皆さんは、学校の友だちのだれかから、いじわるをされたり、イヤな思いをさせられたりすることがあると思います。

そうしたいじわるやイヤなことを、みんなからされたり、何度も繰り返されたりすると、そうされた人はどうしてよいかかわからずにとても苦しい思いをしたり、みんなの前で恥ずかしい目にあわされてつらい思いをしたりします。

これから皆さんに質問するのは、そうしたいじわるやイヤなことを、むりやりされた体験や、反対に弱い立場の友だちにあなたがした体験についてです。

問9 いじわるやイヤなことには、いろいろなものがあります。あなたは、新学期になってから学校の友だちのだれかから、次のようなことをどのくらいされましたか。ア～カのそれぞれについて、一番近いと思う数字に、一つずつ○をつけていってください。

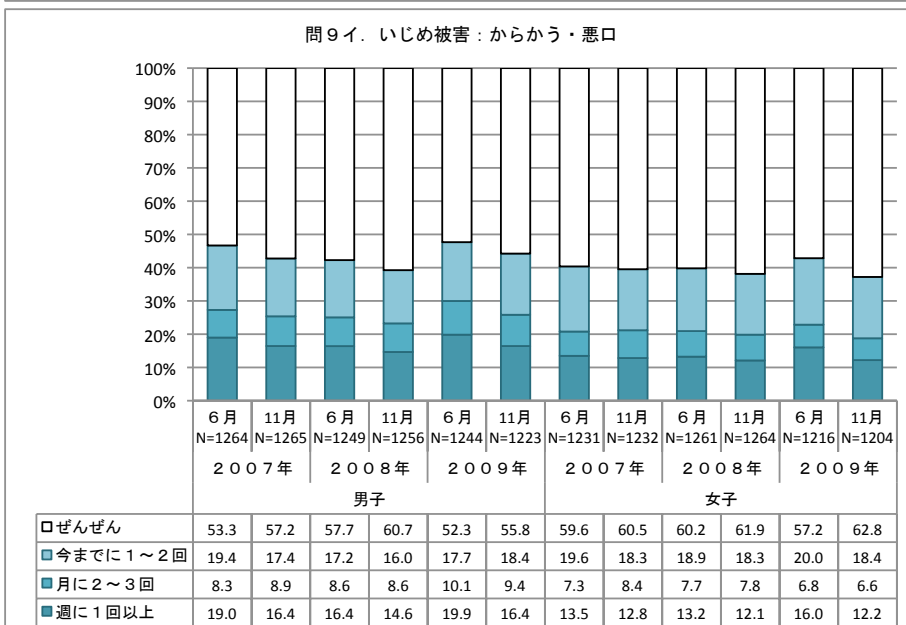
| | 1 週間に 何度も | 1 週間に 1回 くらい | 2 〜 3 回 くらい | 1 か 月 に 1 回 くらい | 1 今 ま で に 2 回 くらい | ぜん ぜん な か っ た |
|-----------------------------------|-----------------|-----------------------|-------------------------|-----------------------------------|--|------------------------------|
| ア. 仲間はずれにされたり、無視されたり、陰で悪口を言われたりした | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| イ. からかわれたり、悪口やおどし文句、イヤなことを言われたりした | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| ウ. 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりした | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| エ. ひどくぶつかられたり、たたかれたり、蹴られたりした | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| オ. お金や物を盗られたり、壊されたりした | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| カ. パソコンや携帯電話で、イヤなことをされたりした | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |



○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

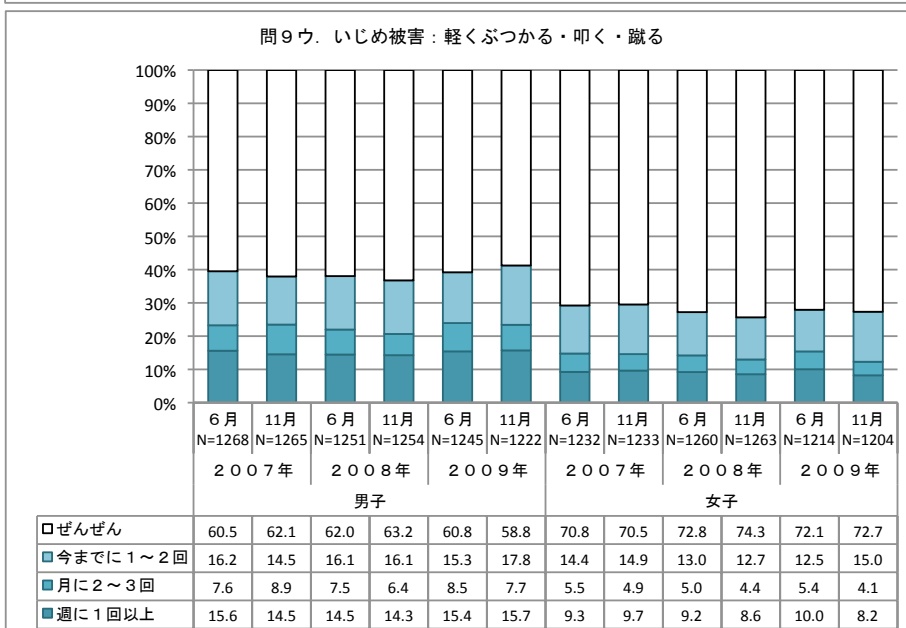
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は2009年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い被害に着目すると、男子は同じですが、女子では2007年の秋も高いと言えます。



○からかう・悪口

男女共に被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、2009年夏が相対的に高かったことが分かります。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

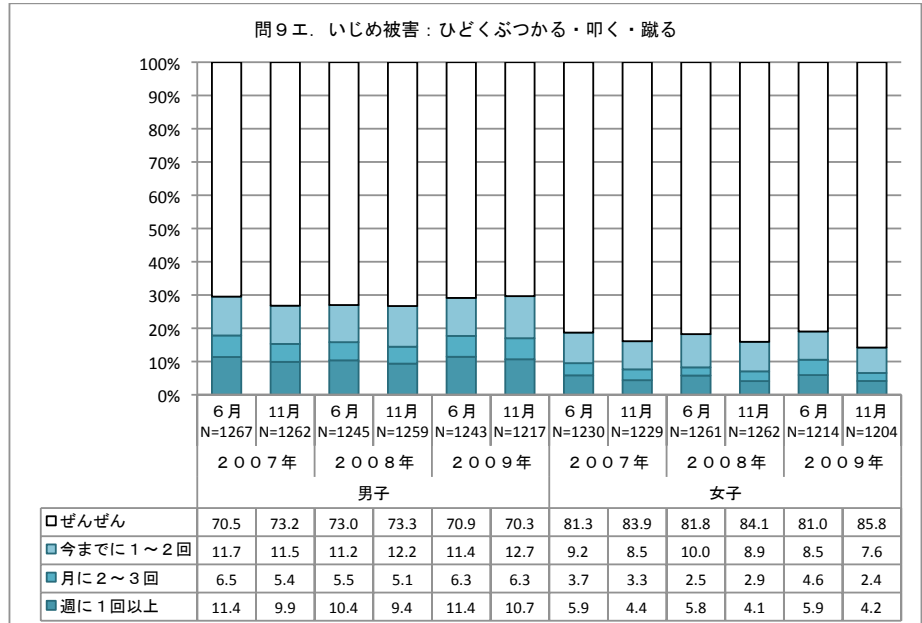
日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことが多い行為と言えます。

男子に多い傾向が窺えます。この3年間に、大きな変動はありませんが、男子は2009年秋、女子は2009年夏が相対的に高かったことが分かります。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の被害経験率が高い傾向が窺えます。

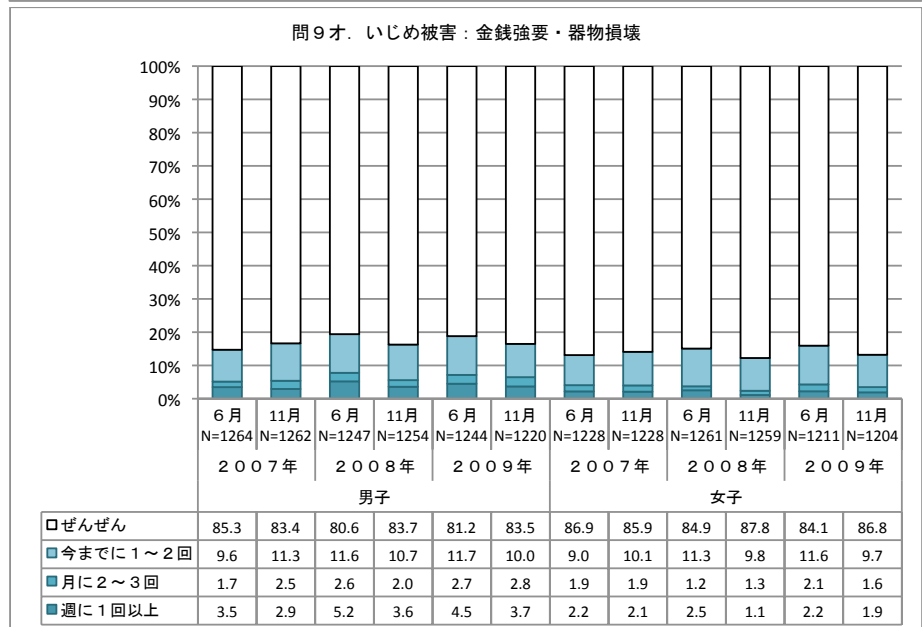
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害も頻度の高い被害も、2007年夏と2009年夏（男子は秋も）が相対的に高いことがわかります。



○金銭強要・器物損壊

男女共に被害経験率は低いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

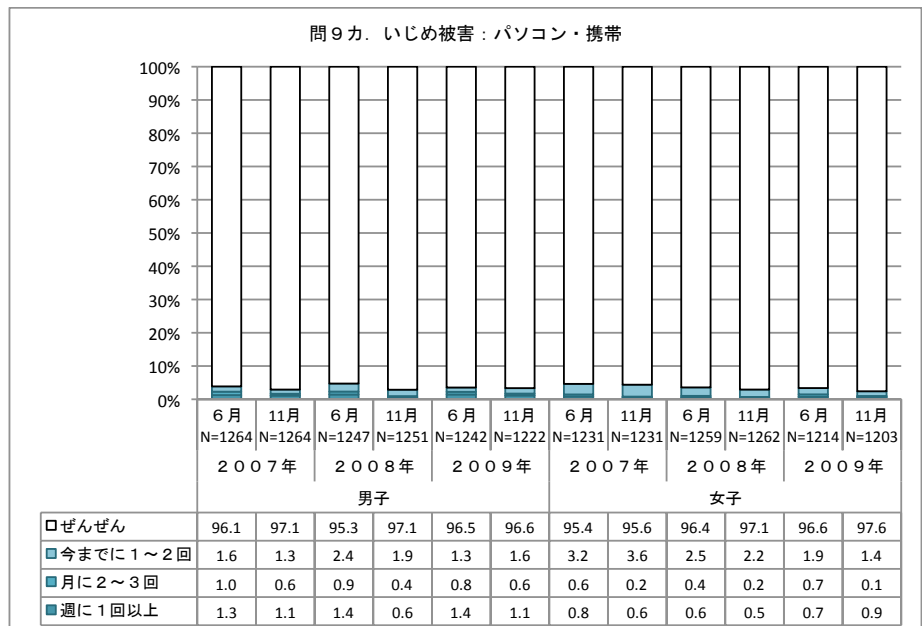
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害も頻度の高い被害も、2008年夏と2009年夏が相対的に高かったことがわかります。

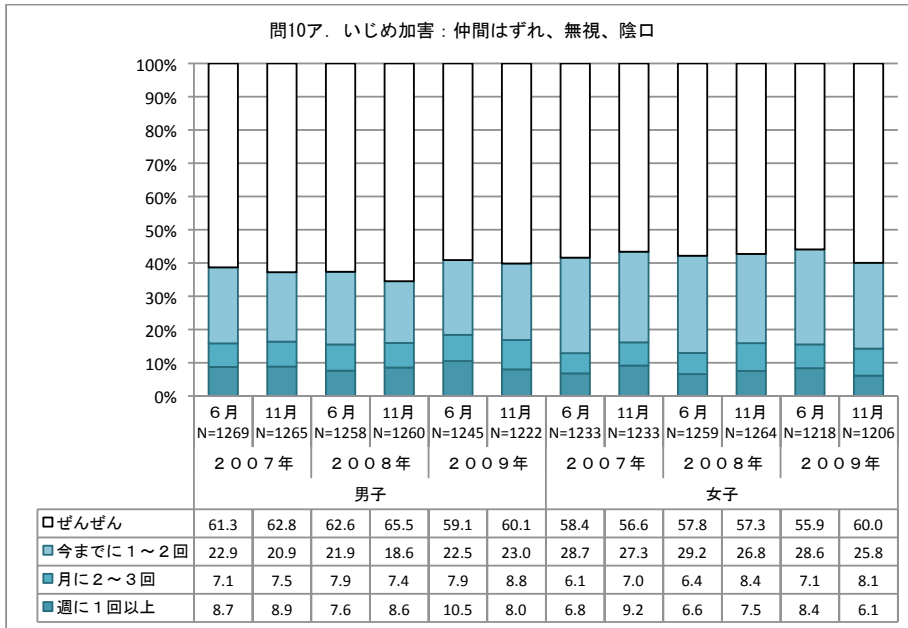


○パソコン・携帯

男女共に、最も被害経験率が低い行為です。

この3年間に、大きな変動はありません。

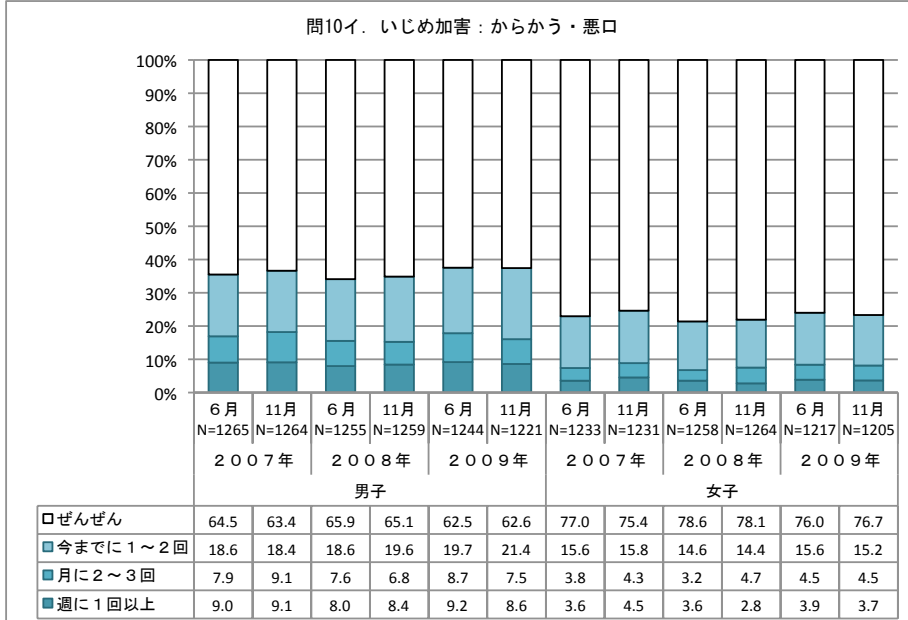




○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に加害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

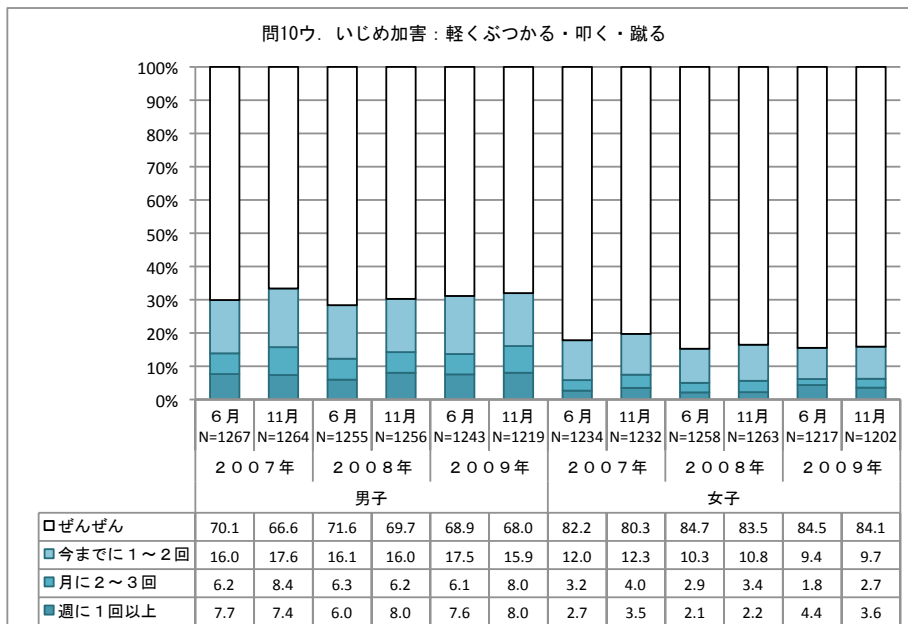
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は2009年夏が相対的に高かったことが分かります。ただし、頻度の高い加害に着目すると、女子の2007年秋も高いと言えます。



○からかう・悪口

男女共に加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、男子は2009年夏、女子は2007年秋が相対的に高かったことが分かります。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことが多い行為と言えます。

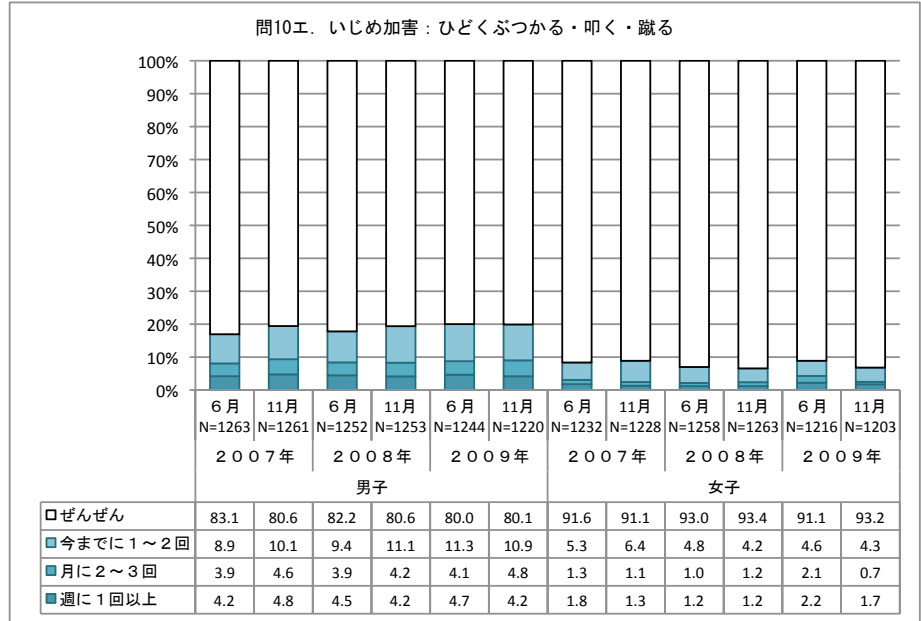
男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は2007年秋、頻度の高い加害に着目すると、男子は2008・2009年秋、女子は2009年夏が相対的に高かったことが分かります。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は2009年夏が相対的に高かったことが分かります。ただし、頻度の高い加害に着目すると、男子は2007年秋が高いと言えます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に加害経験率は低いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

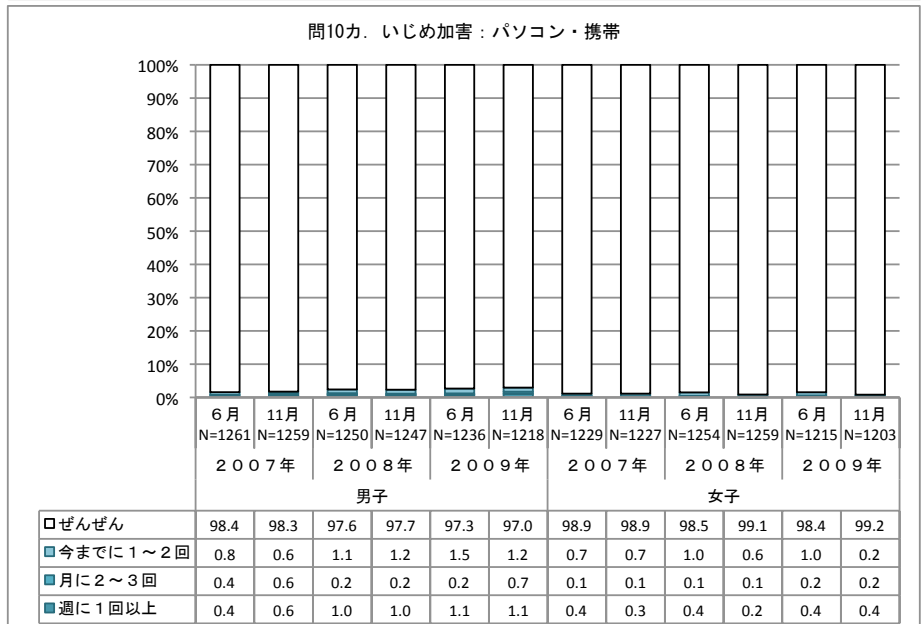
この3年間に、大きな変動はありませんが、男子では2008年、女子では2009年が相対的に高かったことが分かります。

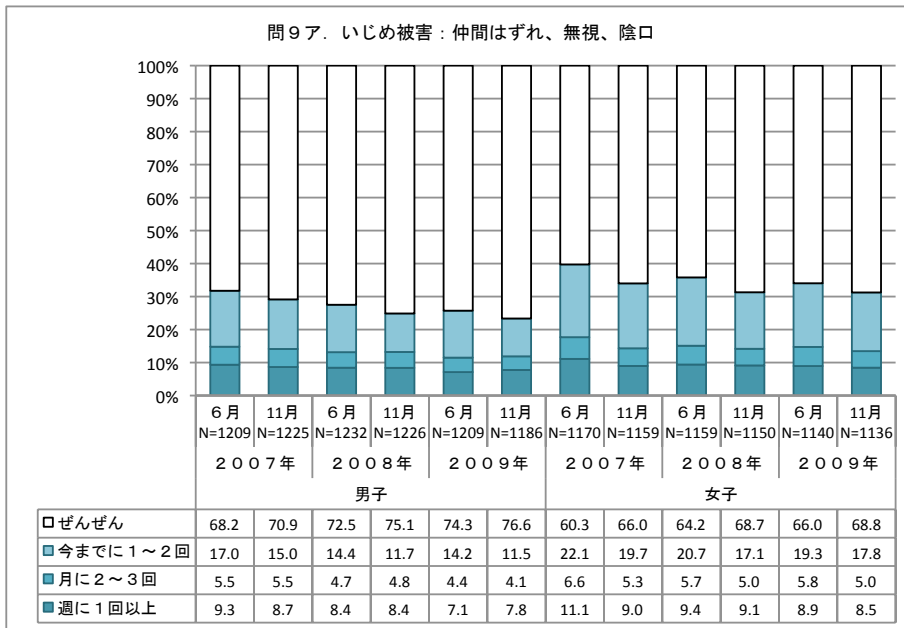


○パソコン・携帯

男女共に、最も経験率が低い行為です。

この3年間に、大きな変動はありません。

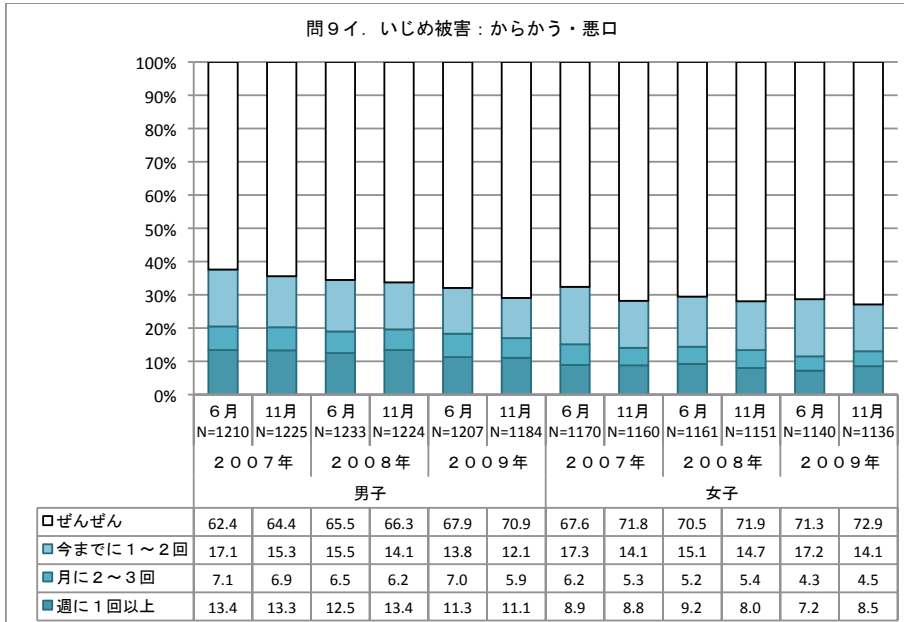




○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に被害経験率は高いですが、女子に多い傾向が窺えます。

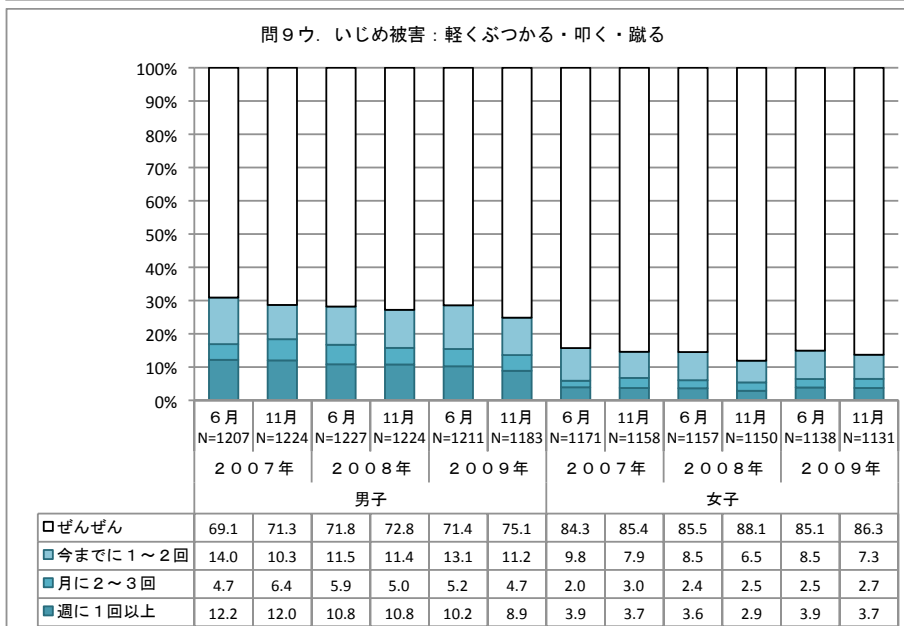
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害も頻度の高い被害も、2007年夏が相対的に高かったことが分かります。



○からかう・悪口

男女共に被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は2007年夏、頻度の高い被害は男子では2008年秋、女子では2008年夏が相対的に高かったことが分かります。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことが多い行為と言えます。

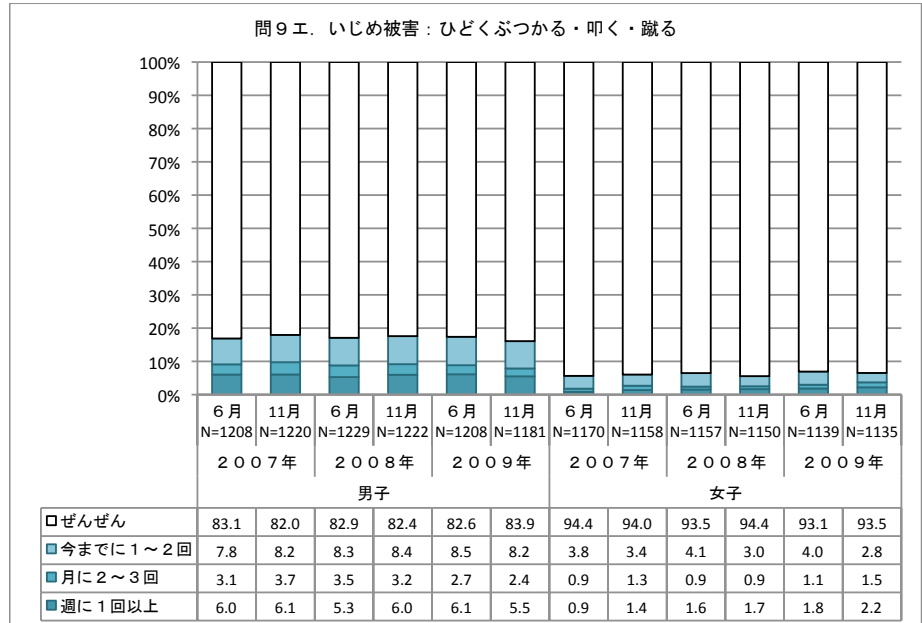
男子に多い傾向が窺えます。

ここ3年の間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は2007年夏、女子の頻度の高い被害は2009年夏も、相対的に高かったことが分かります。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の被害経験率が高い傾向が窺えます。

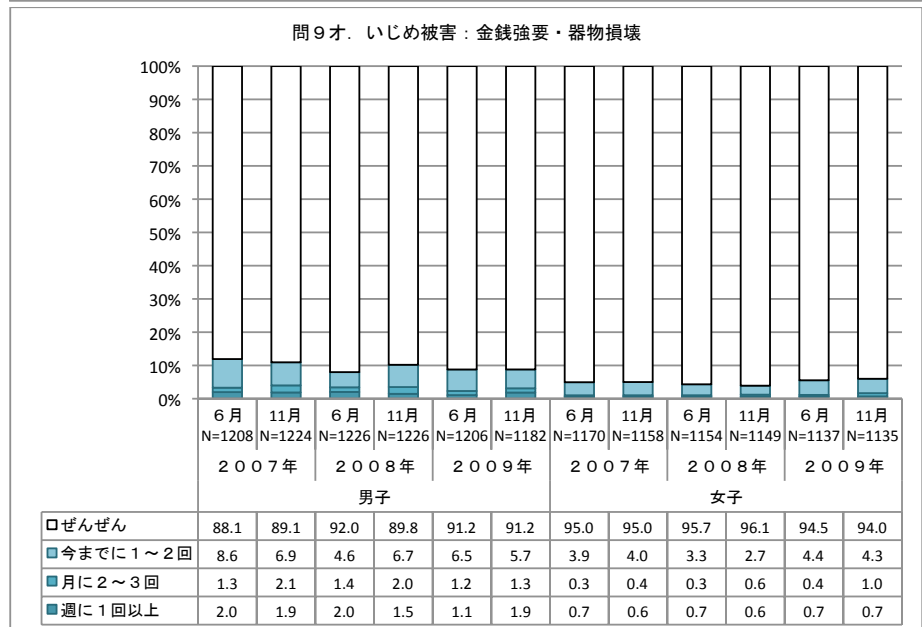
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害も頻度の高い被害も、男子では2007年秋や2009年夏、女子では2009年夏や秋が、相対的に高かったことが分かります。



○金銭強要・器物損壊

男女共に経験率は低いですが、男子に多い傾向が窺えます。

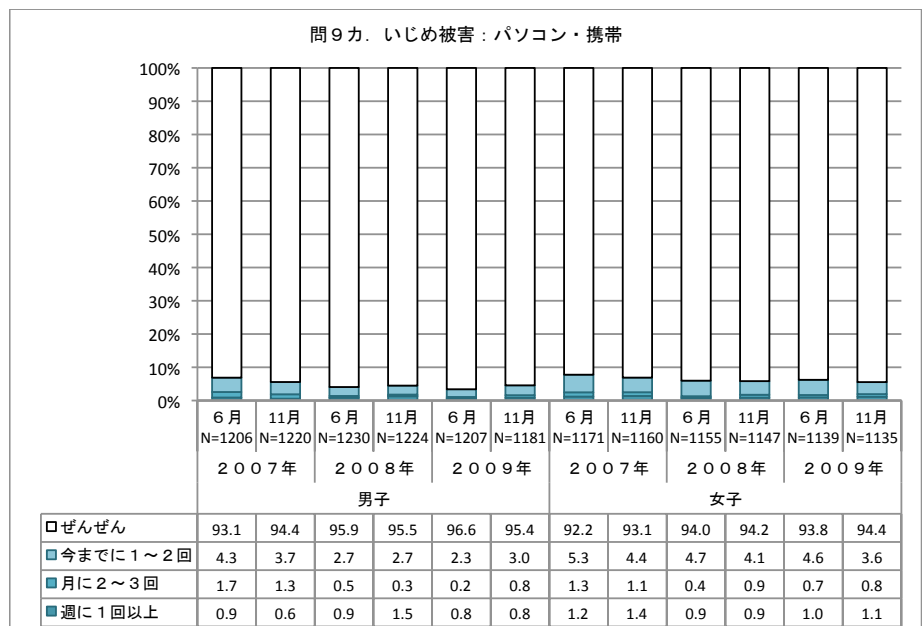
この3年間に、大きな変動はありませんが、頻度の高い被害に着目すると、男子では2009年秋がやや少なかったようです。



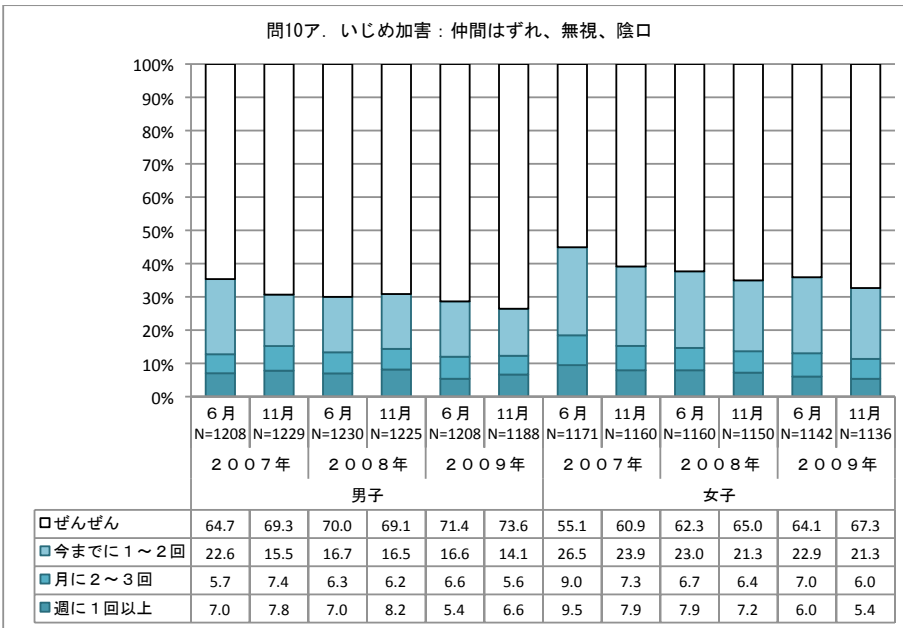
○パソコン・携帯

男女共に、最も経験率が低い行為です。

この3年間に、大きな変動はありません。



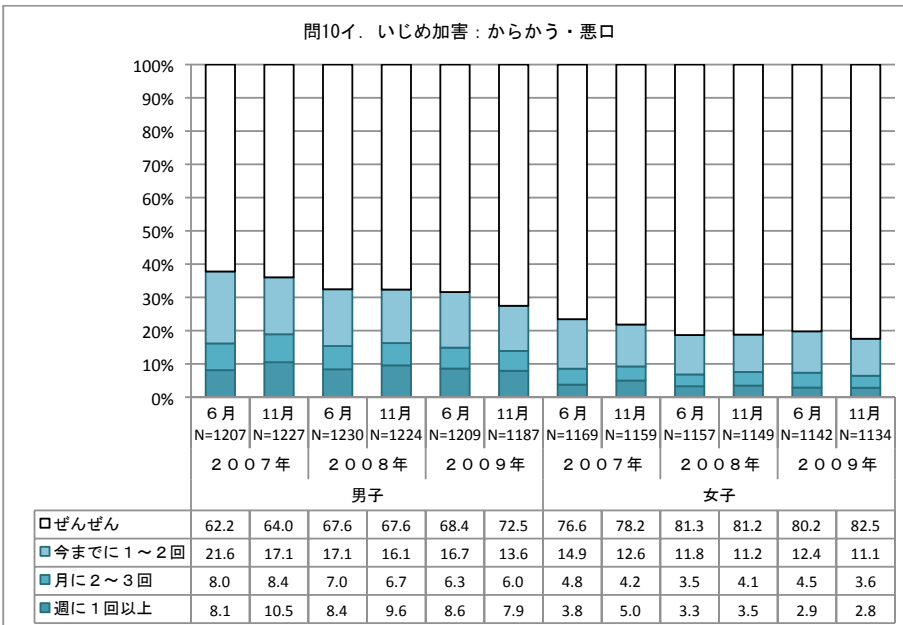
2007～2009年度 中学校 いじめ加害経験率



○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に加害経験率は高いですが、女子に多い傾向が窺えます。

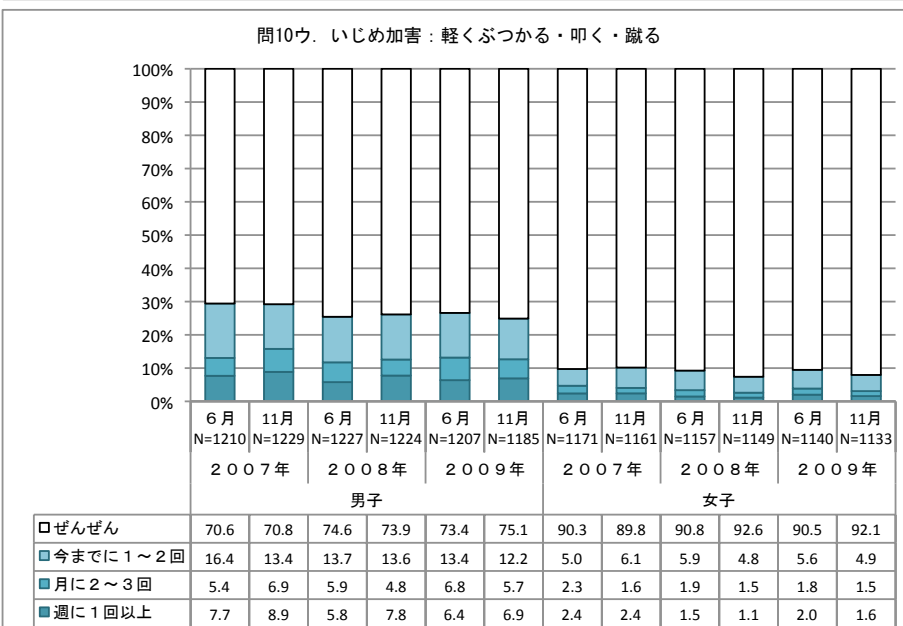
この3年間に、大きな変動はありませんが、男子では全体の加害は2007年夏、頻度の高い加害は2008年秋、女子では共に2007年夏が相対的に高かったことが分かります。



○からかう・悪口

男女共に加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害や頻度の高い加害は2007年が相対的に高かったことが分かります。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことが多い行為と言えます。

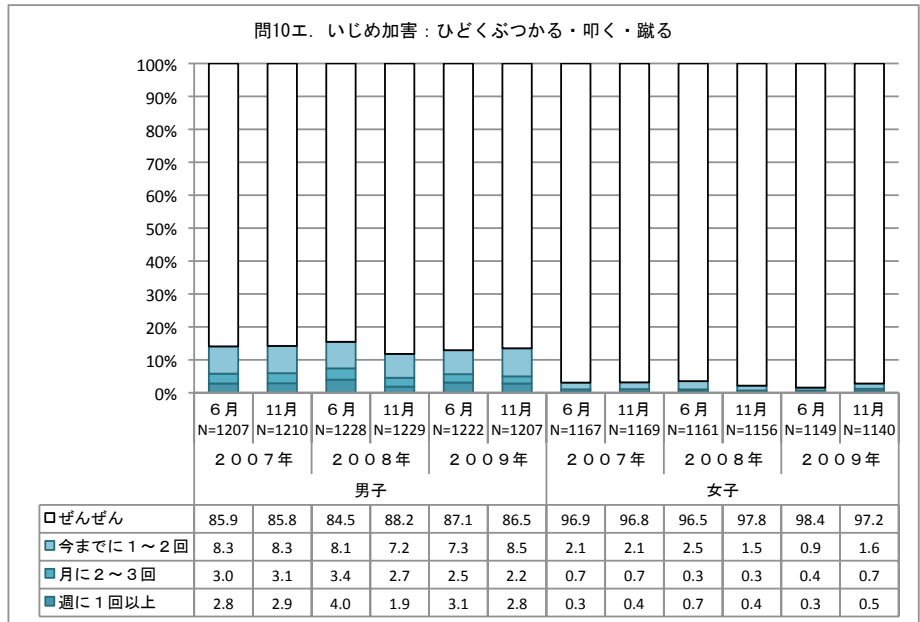
男子に多い傾向が窺えます。

ここ3年の間に、大きな変動はありませんが、頻度の高い加害に着目すると、2007年秋が、相対的に高かったことが分かります。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の加害経験率が高い傾向が窺えます。

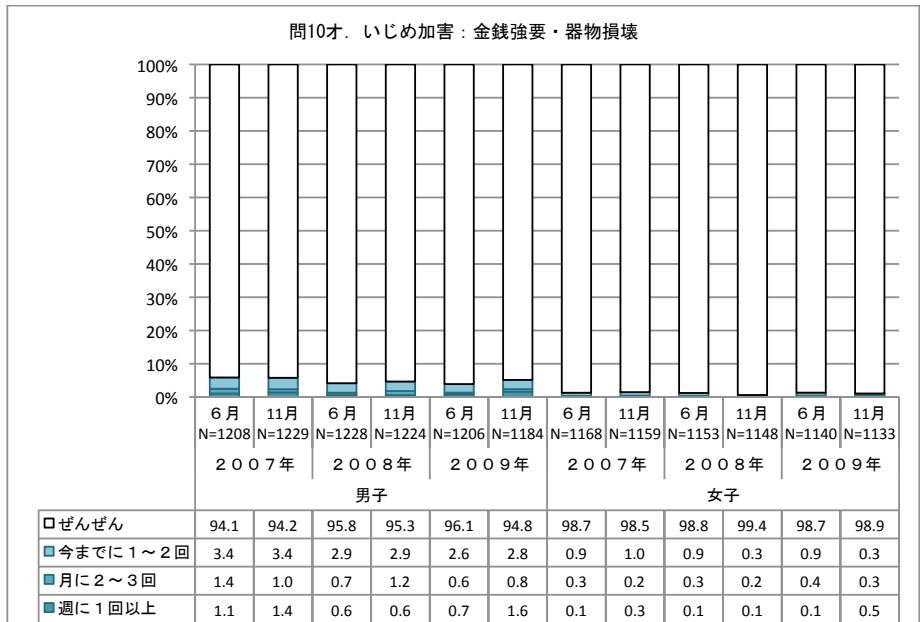
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害も頻度の高い加害も、2008年夏が、相対的に高かったことが分かります。



○金銭強要・器物損壊

男女共に加害経験率は低いですが、男子に多い傾向が窺えます。

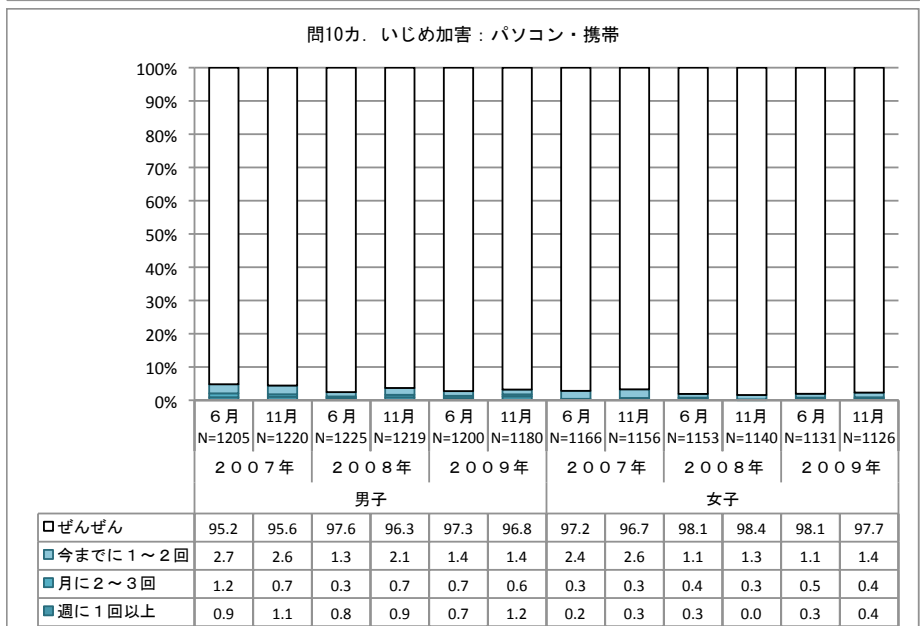
この3年間に、大きな変動はありませんが、頻度の高い加害に着目すると、男子では2007年秋と2009年秋が相対的に高かったことが分かります。

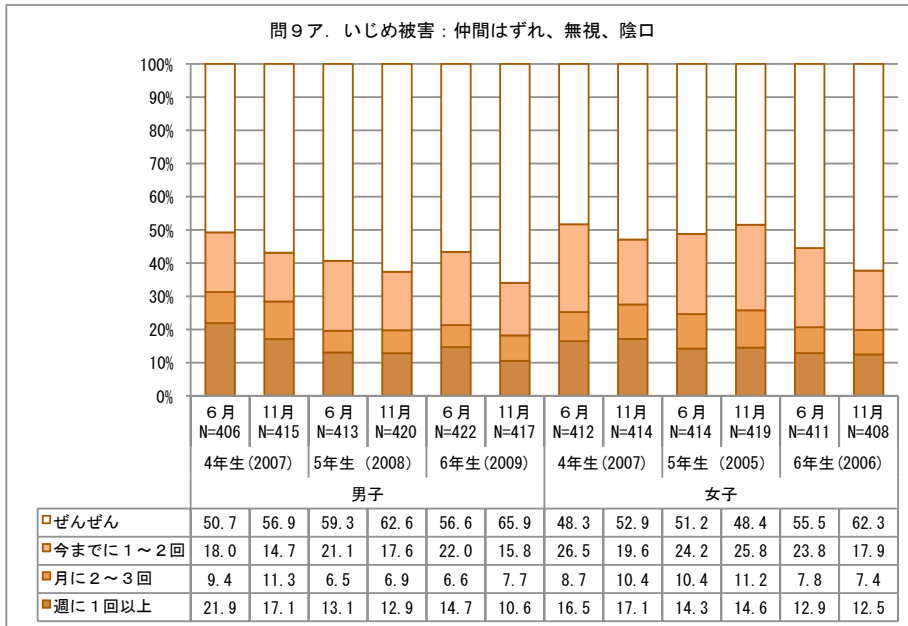


○パソコン・携帯

男女共に、加害経験率が低い行為です。

この3年間に、大きな変動はありません。

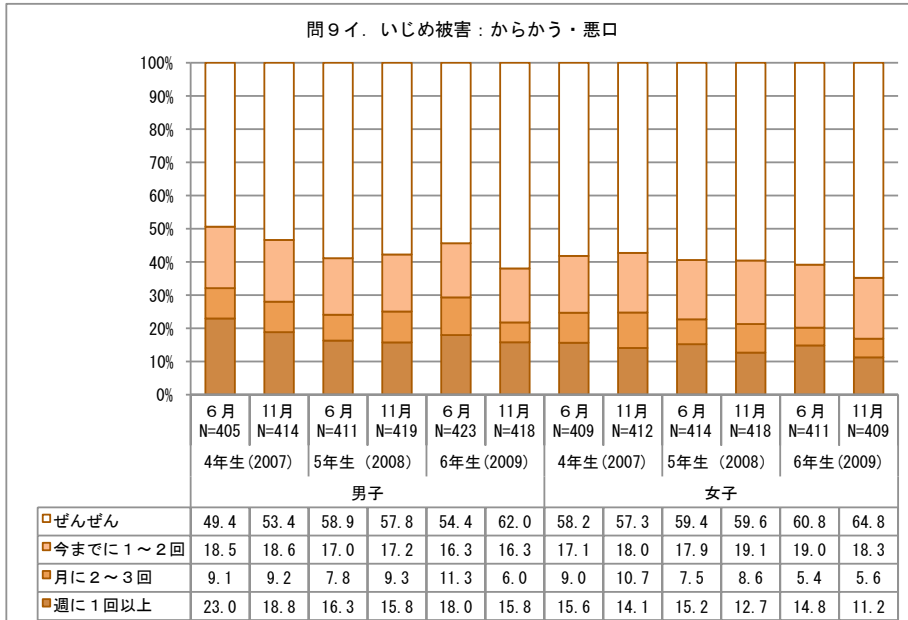




○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

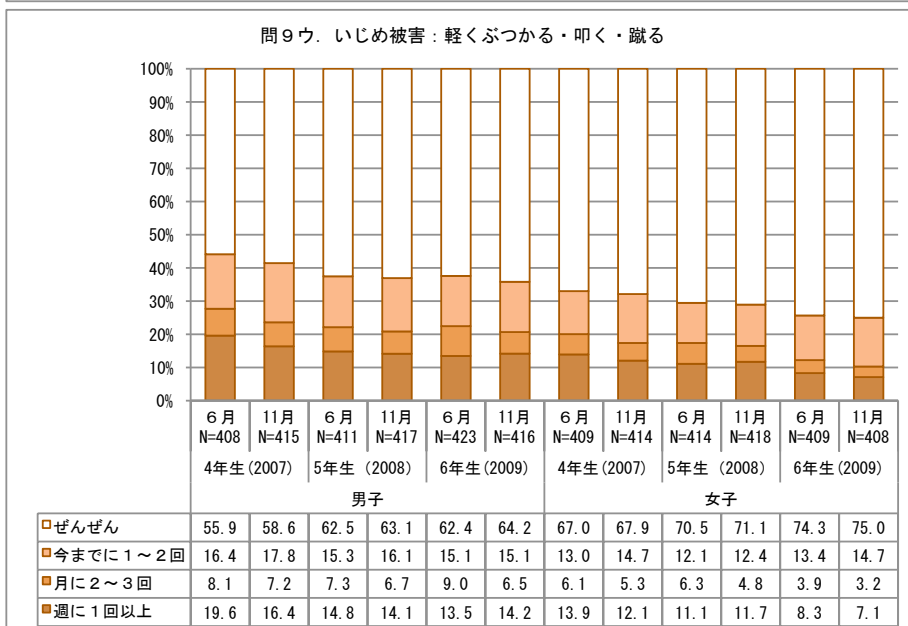
6年生の秋には、少し減少する傾向が窺えます。



○からかう・悪口

男女共に被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

全体で見ると、5~6年生でやや減少する傾向が窺えます。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことが多い行為と言えます。

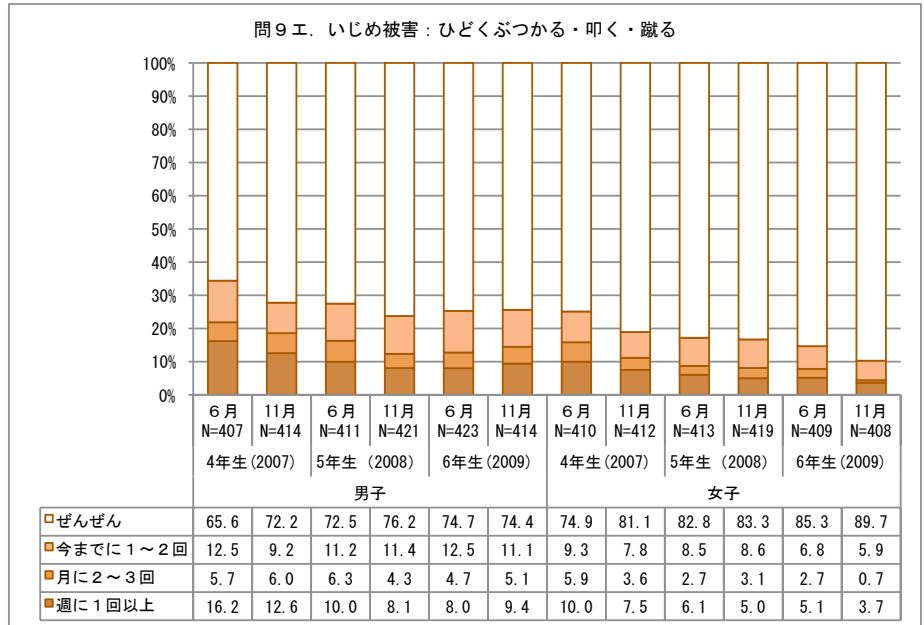
やや男子に多い傾向が窺えます。

4年生から6年生にかけて、少しずつ減少する傾向が窺えます。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の被害経験率が高い傾向が
窺えます。

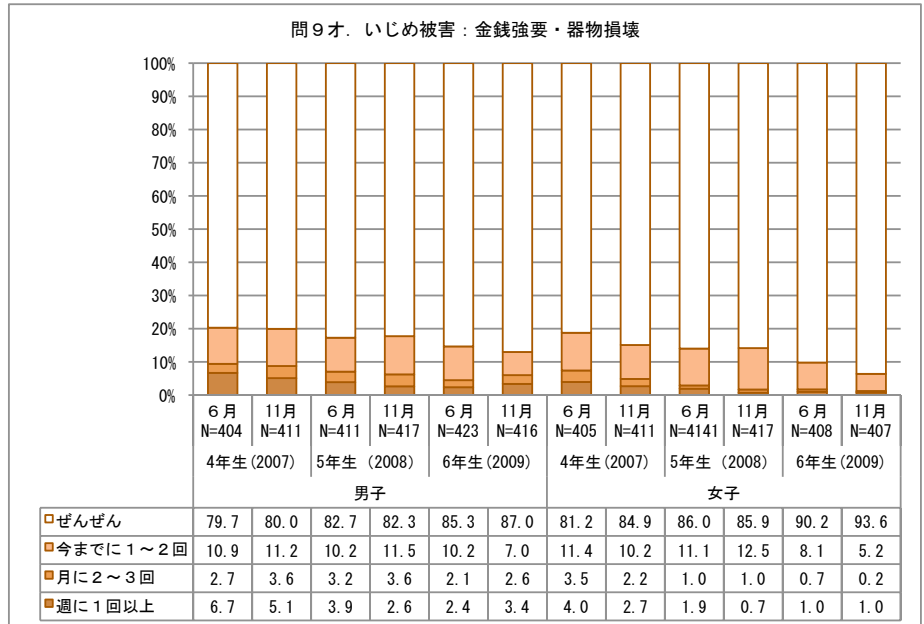
4年生から6年生にかけて、減
少する傾向が窺えます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に被害経験率は低いで
すが、男子に多い傾向が窺えます。

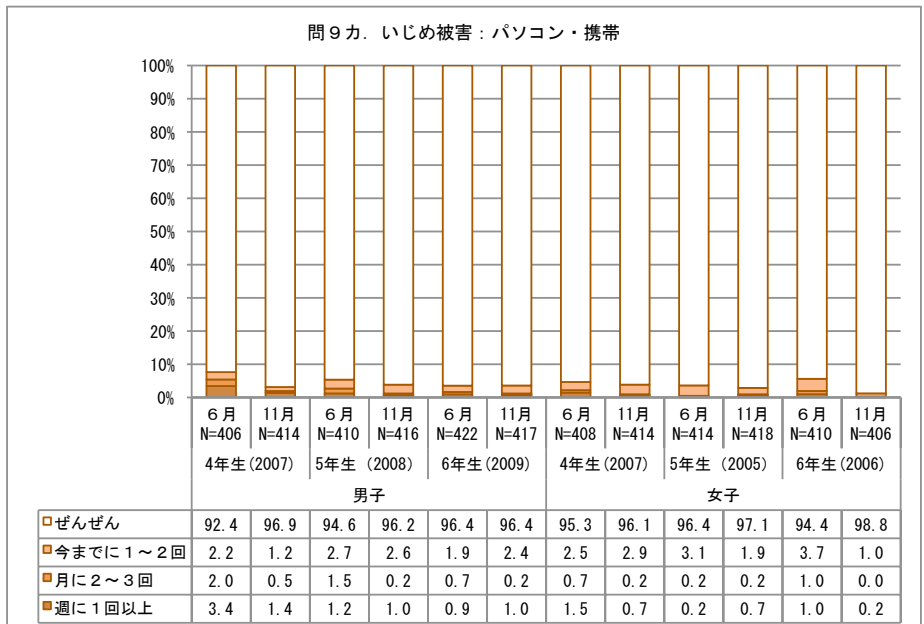
4年生から6年生にかけて、少
しずつ減少する傾向が窺えます。

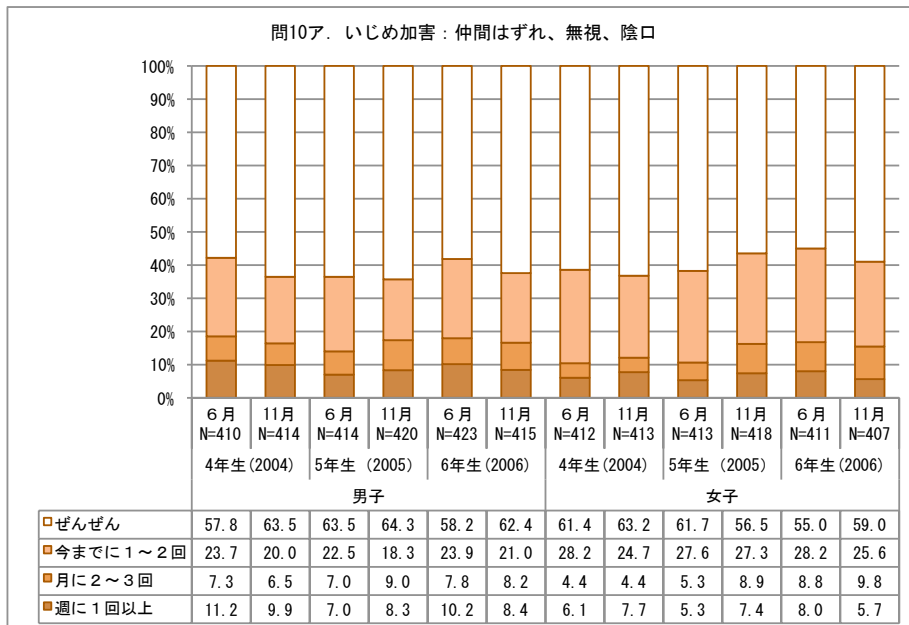


○パソコン・携帯

男女共に、最も被害経験率が低
い行為です。

学年進行に伴うはっきりした傾
向は窺えません。

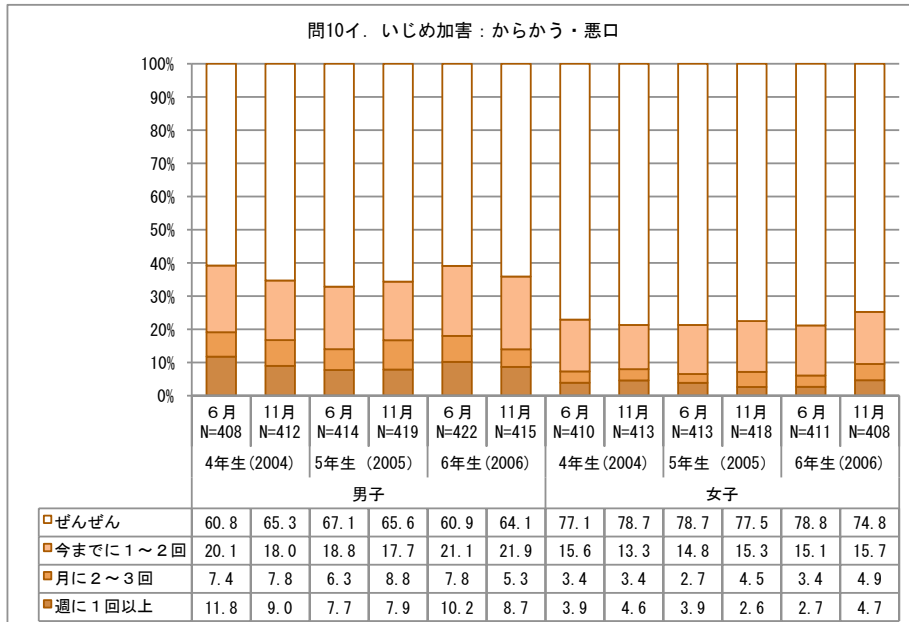




○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に加害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

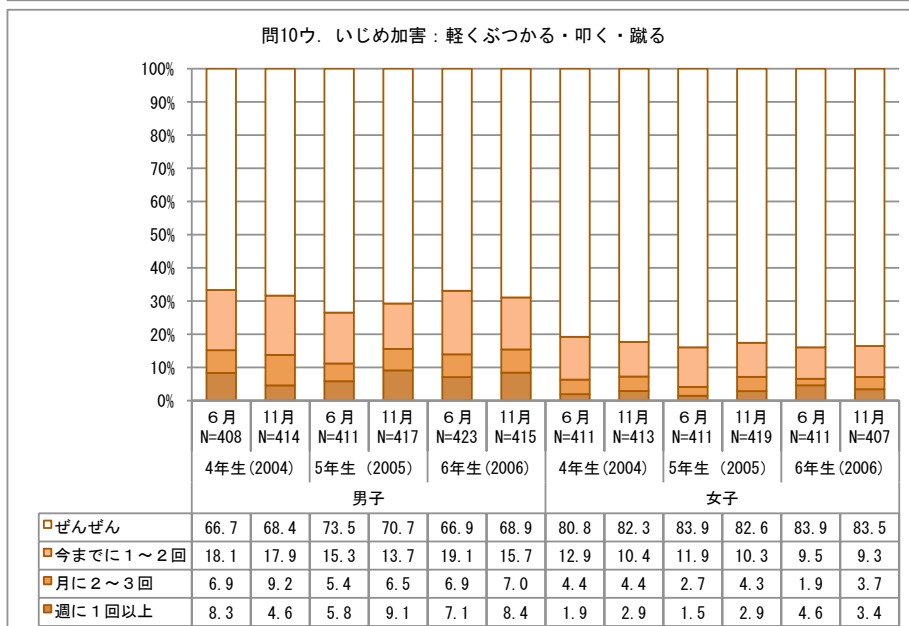
4年生と6年生が高い傾向が窺えます。



○からかう・悪口

男女共に加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。

4年生と6年生が高い傾向が窺えます。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことが多い行為と言えます。

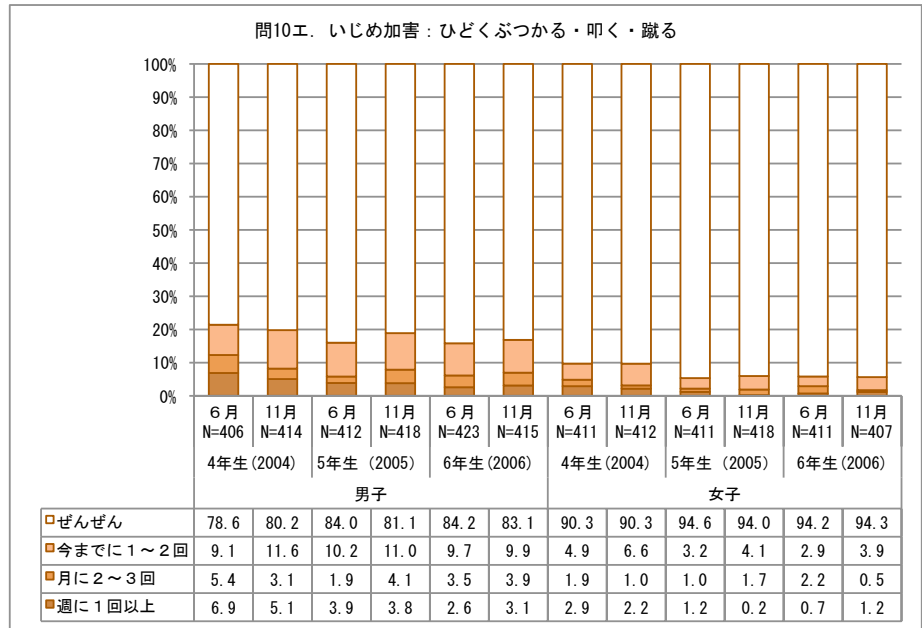
男子に多い傾向が窺えます。

学年進行に伴う傾向は、頻度の高い加害は、5~6年生でやや高め傾向が窺えます。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の加害経験率が高い傾向が
窺えます。

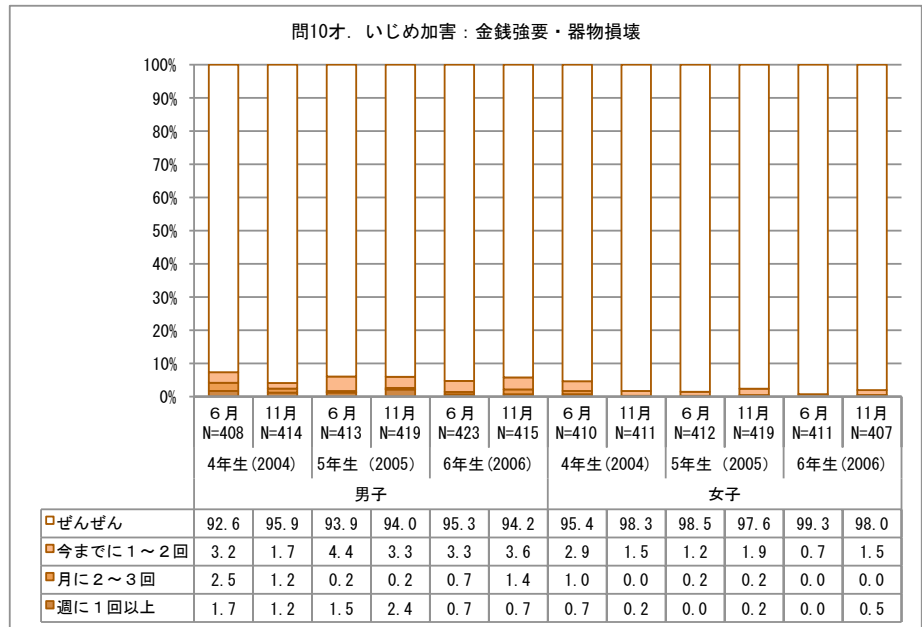
4年生から6年生にかけて、減
少する傾向が窺えます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に加害経験率は低いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

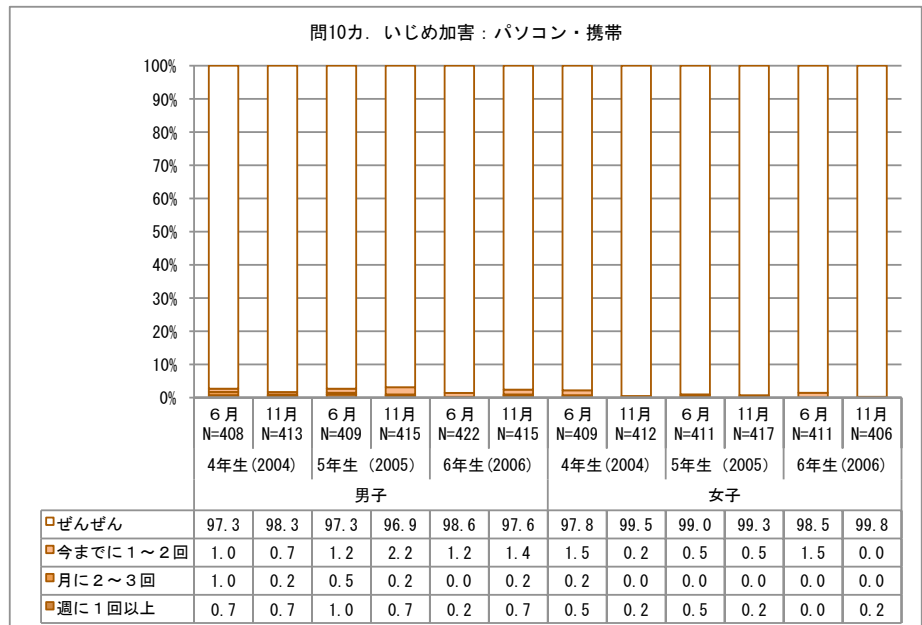
学年進行に伴うはっきりした傾向は窺えません。

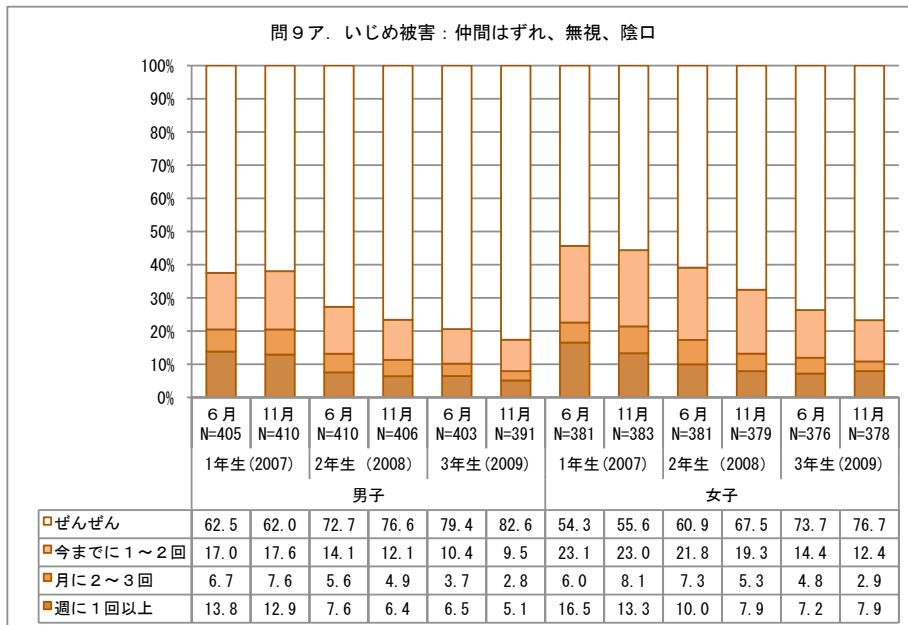


○パソコン・携帯

男女共に、最も加害経験率が低い行為です。

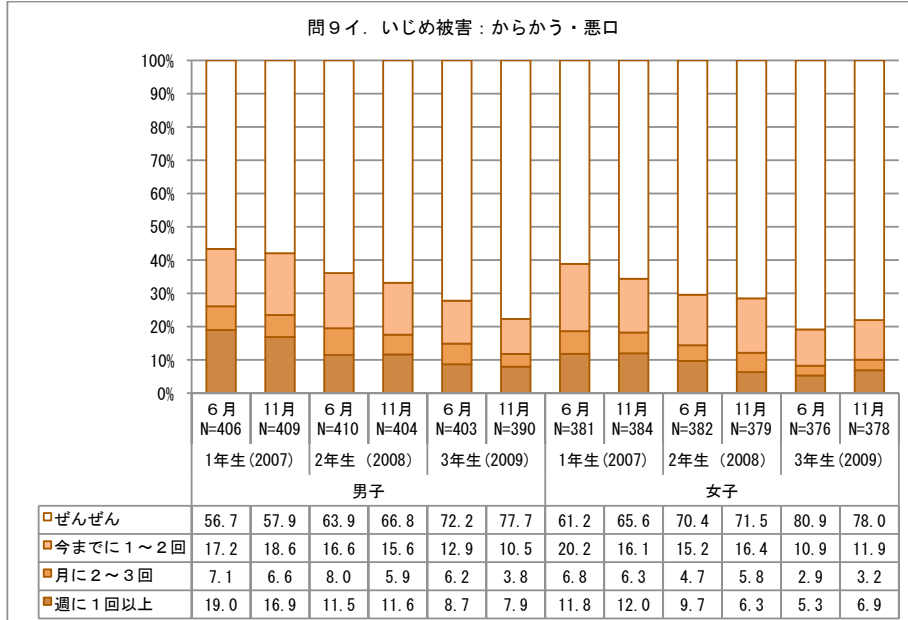
学年進行に伴うはっきりした傾向は窺えません。





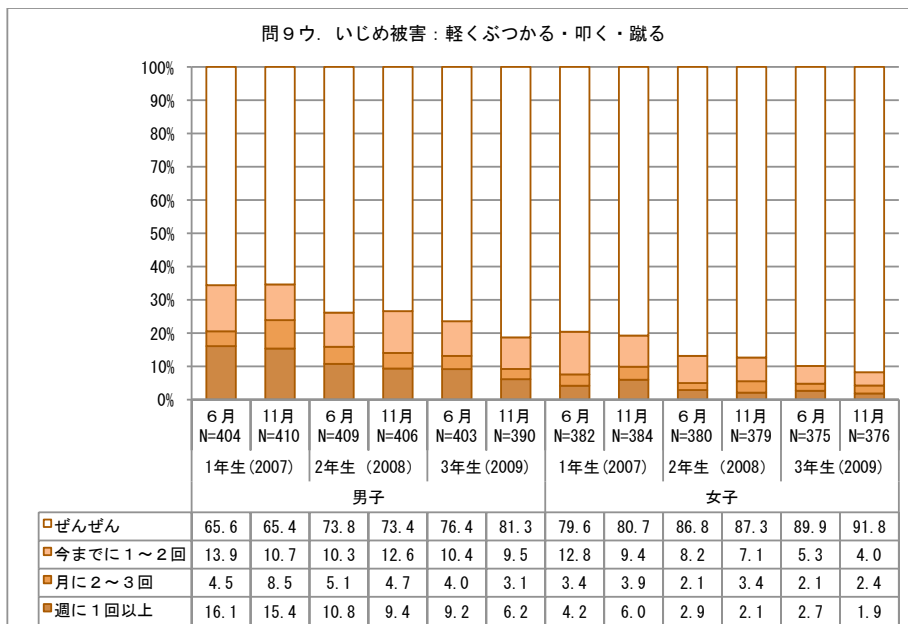
○仲間はずれ・無視・陰口

男女ともに経験率は高いですが、女子に多い傾向が窺えます。
1年生がピークで、少しずつ減少していく傾向が窺えます。



○からかう・悪口

男女ともに経験率は高いです。
1年生がピークで、少しずつ減少していく傾向が窺えます。

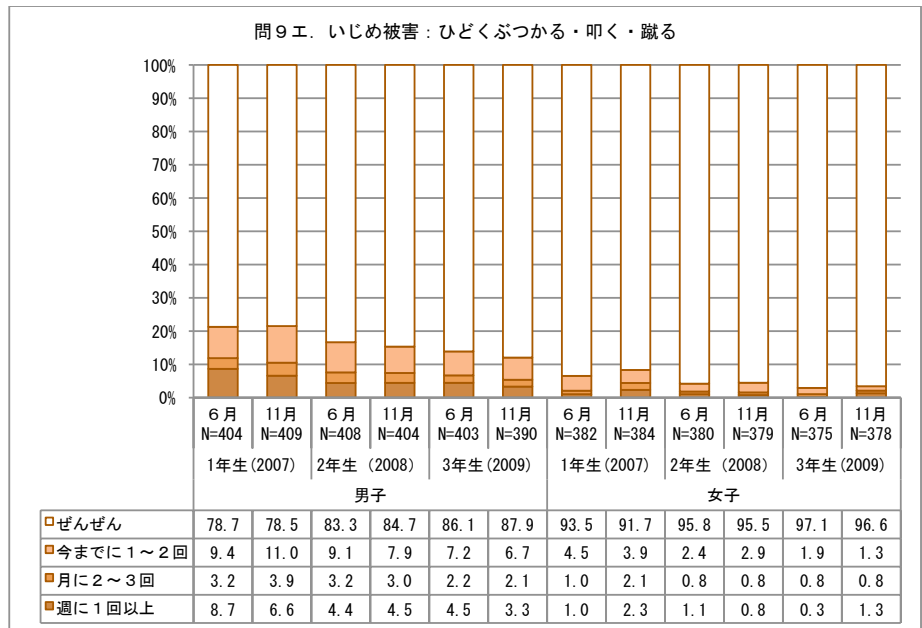


○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことが多い行為と言えます。
男子に多い傾向が窺えます。
1年生がピークで、少しずつ減少していく傾向が窺えます。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

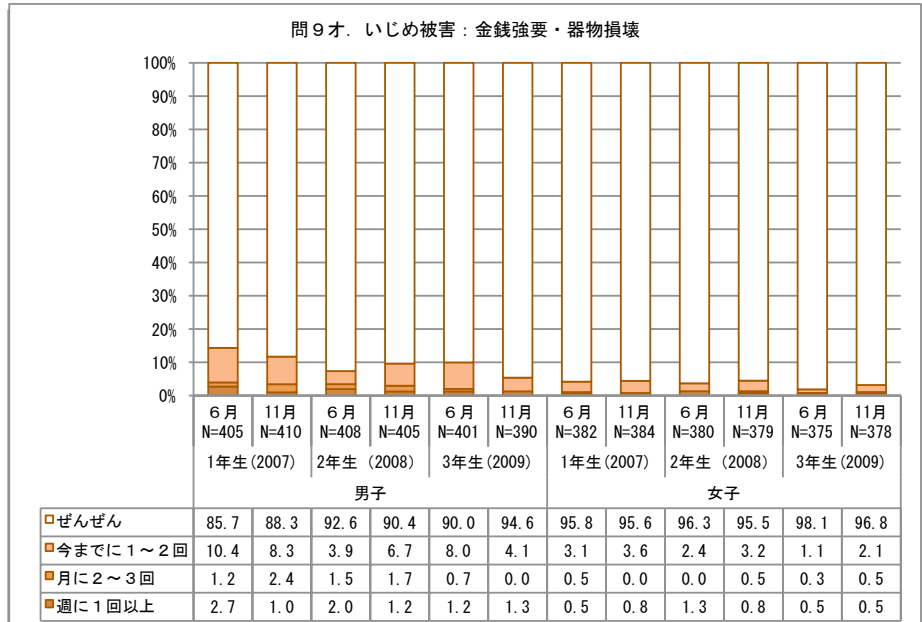
男子に多い傾向が窺えます。
1年生がピークで、少しずつ減少していく傾向が窺えます。



○金銭強要・器物損壊

男女ともに経験率は低いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

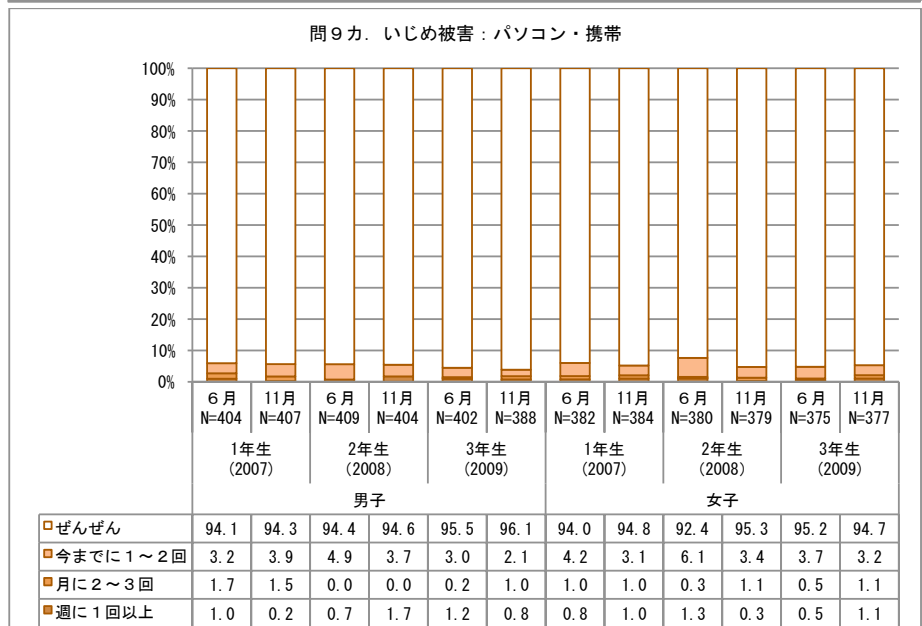
男子では、1年生から減少していく傾向が窺えます。

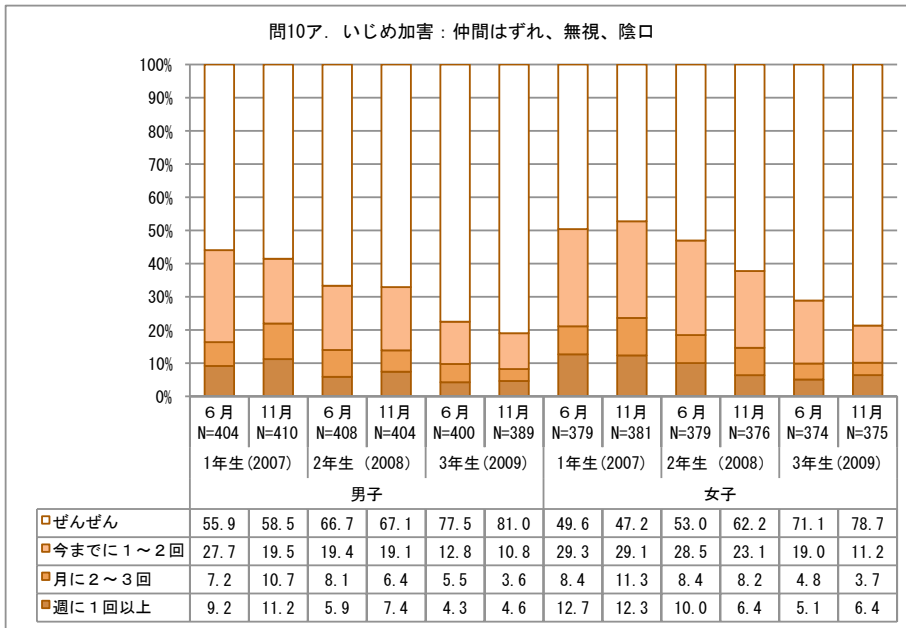


○パソコン・携帯

男女ともに、経験率は低い行為です。

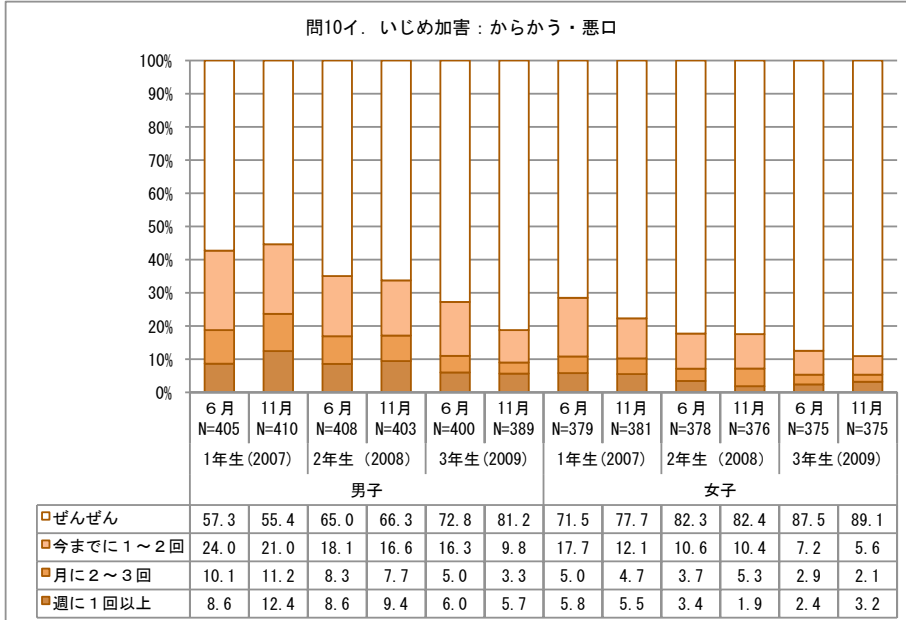
学年進行に伴うはっきりした傾向は窺えません。





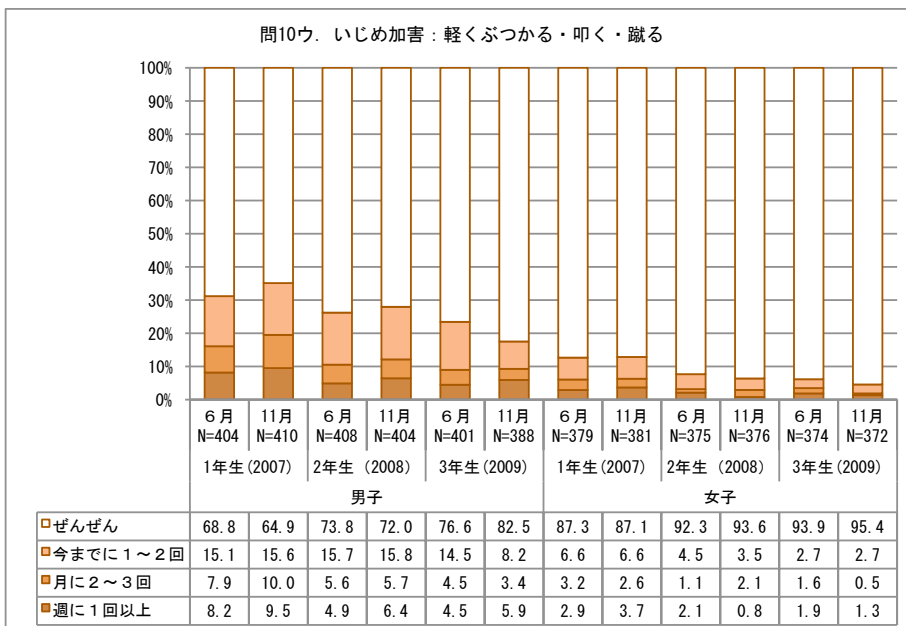
○仲間はずれ・無視・陰口

男女ともに経験率は高いですが、女子に多い傾向が窺えます。
1年生をピークに減少傾向が窺えます。



○からかう・悪口

男女ともに経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。
1年生をピークに減少傾向が窺えます。

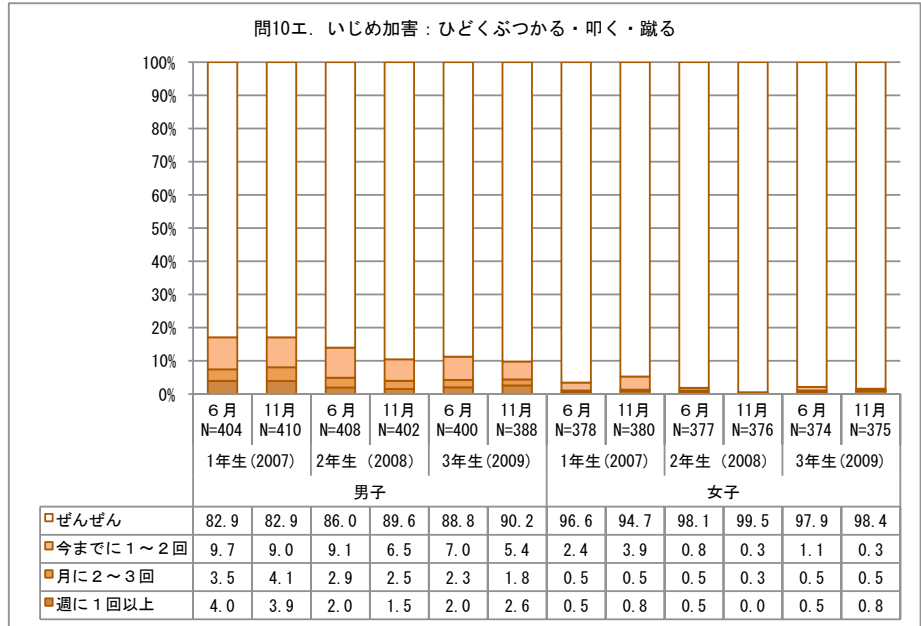


○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことが多い行為と言えます。
男子に多い傾向が窺えます。
1年生をピークに減少傾向が窺えます。

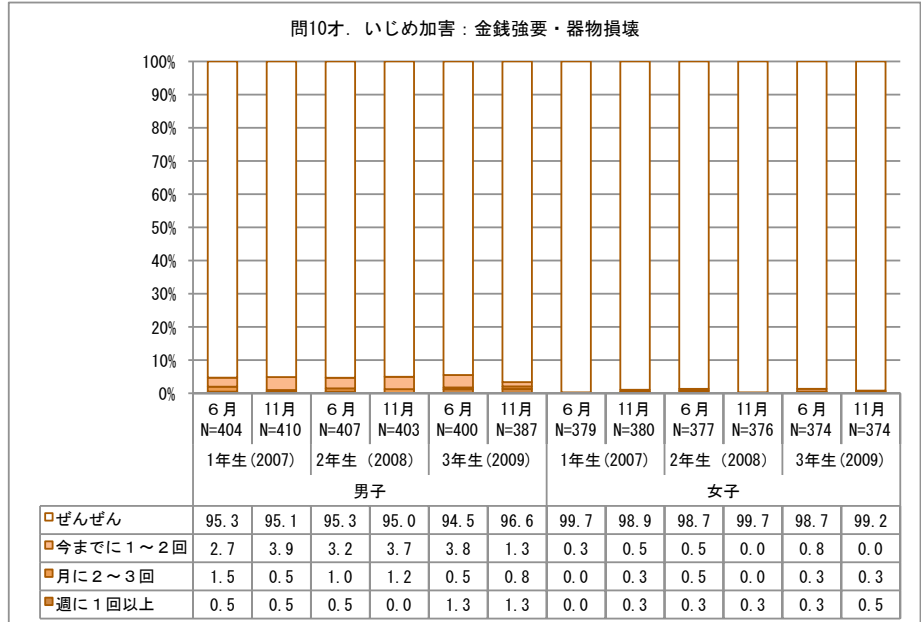
○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子に多い傾向が窺えます。
1年生にやや多い傾向があります。



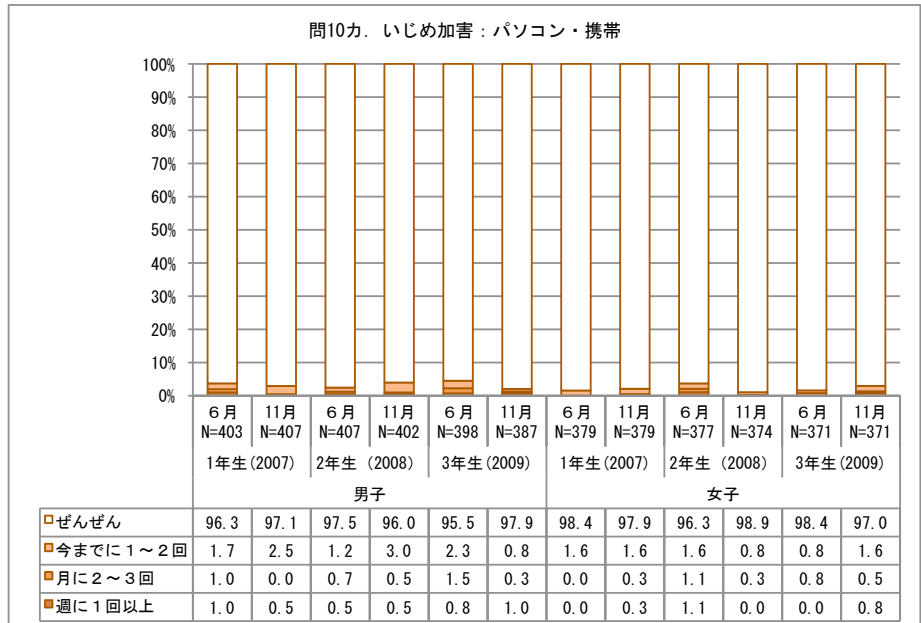
○金銭強要・器物損壊

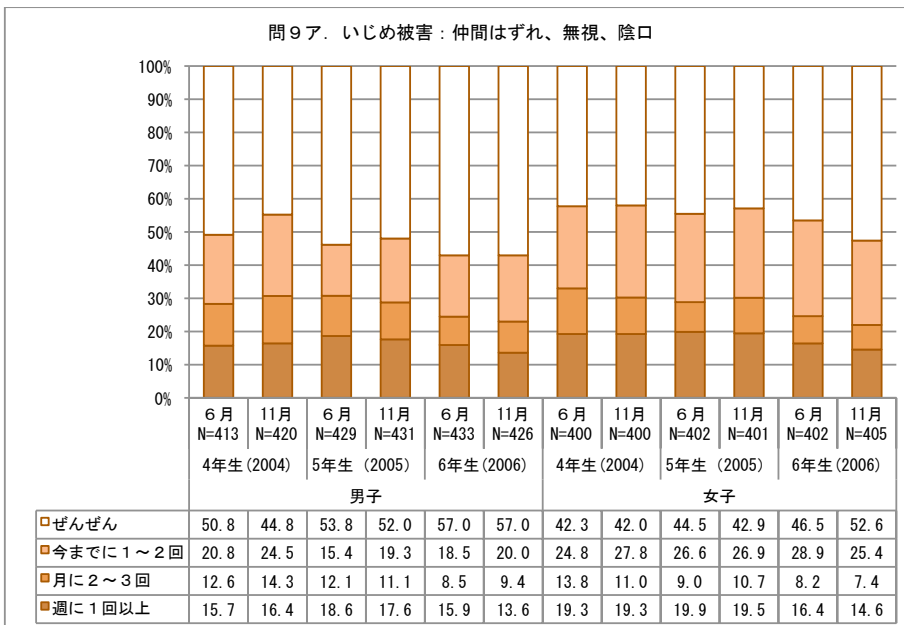
男女ともに経験率は低いです
が、男子に多い傾向が窺えます。
学年進行に伴うはっきりした傾
向は窺えません。



○パソコン・携帯

男女ともに、経験率は低い行為
です。
学年進行に伴うはっきりした傾
向は窺えません。

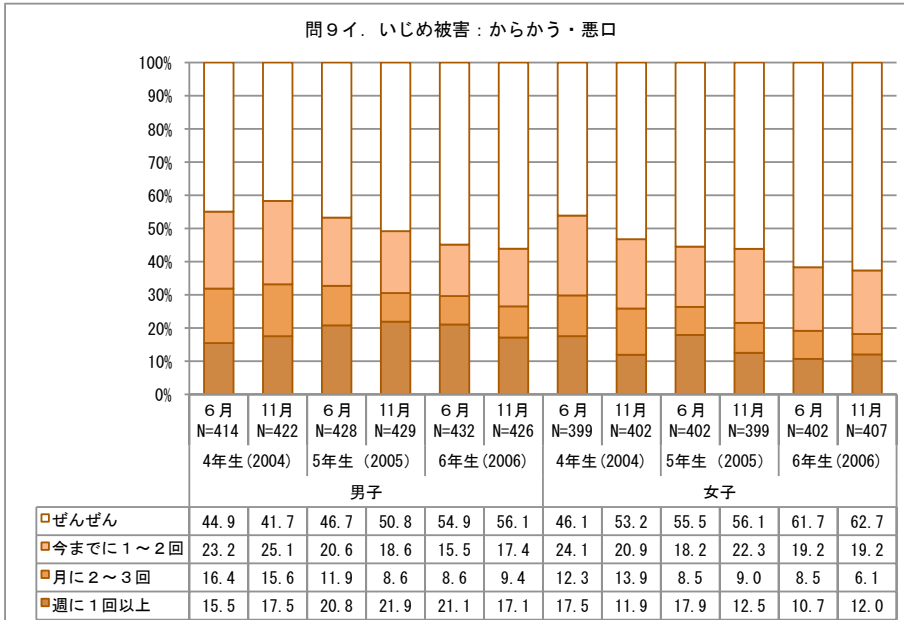




○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

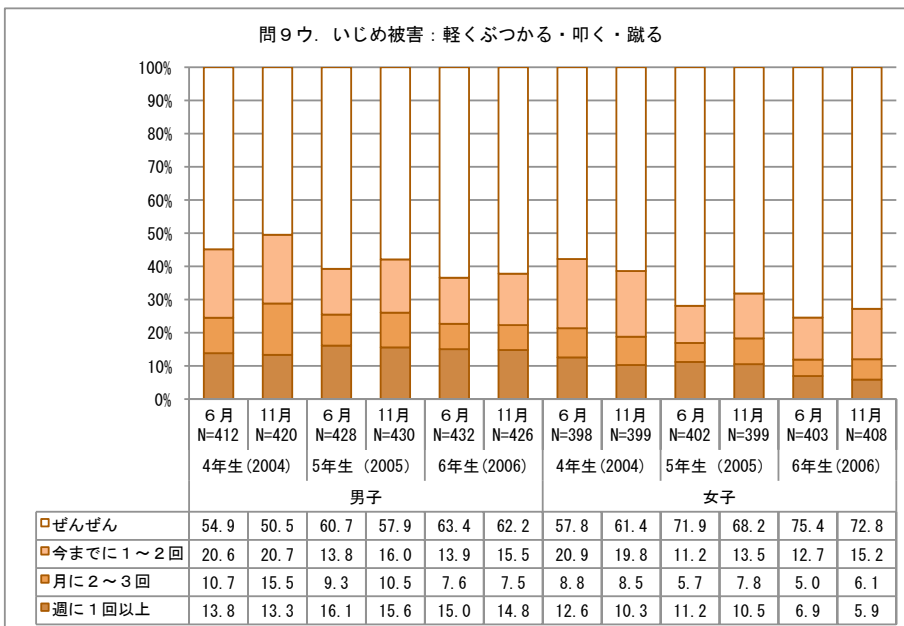
4年生から6年生にかけて、少しずつ減少する傾向が窺えます。



○からかう・悪口

男女共に被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

4年生から6年生にかけて、少しずつ減少する傾向が窺えます。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことが多い行為と言えます。

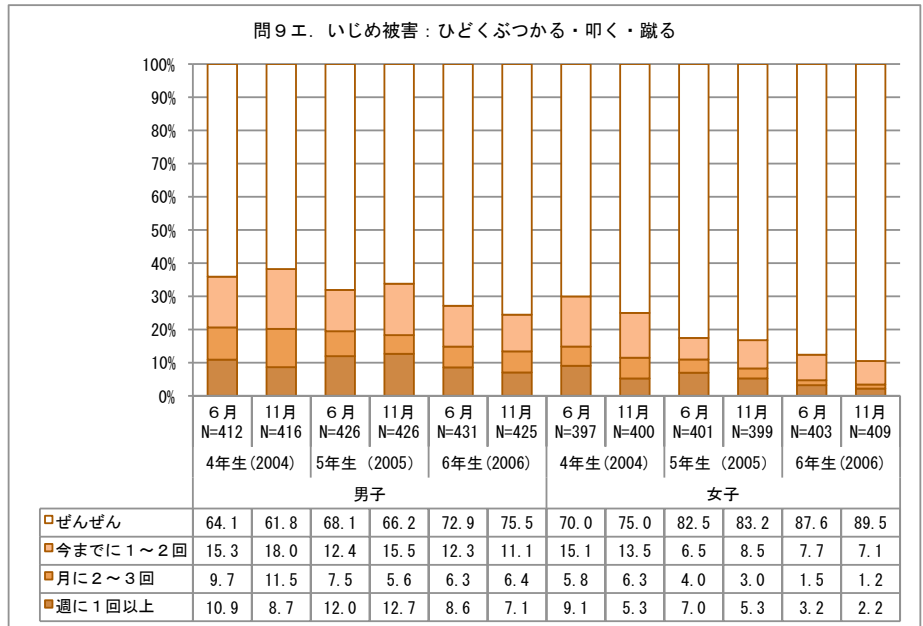
やや男子に多い傾向が窺えます。

4年生から6年生にかけて、少しずつ減少する傾向が窺えます。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の被害経験率が高い傾向が
窺えます。

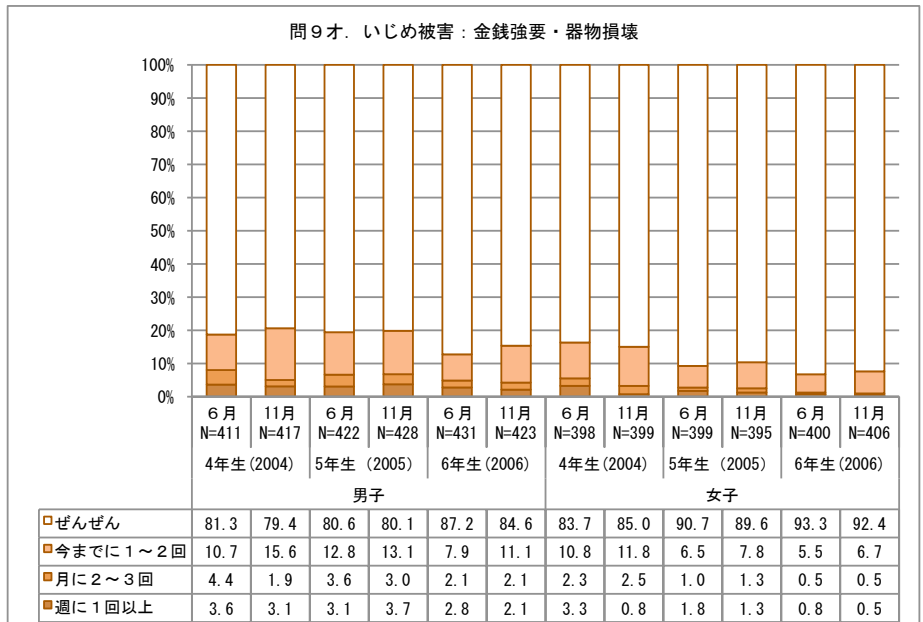
4年生から6年生にかけて、減
少する傾向が窺えます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に被害経験率は低いです
が、男子に多い傾向が窺えます。

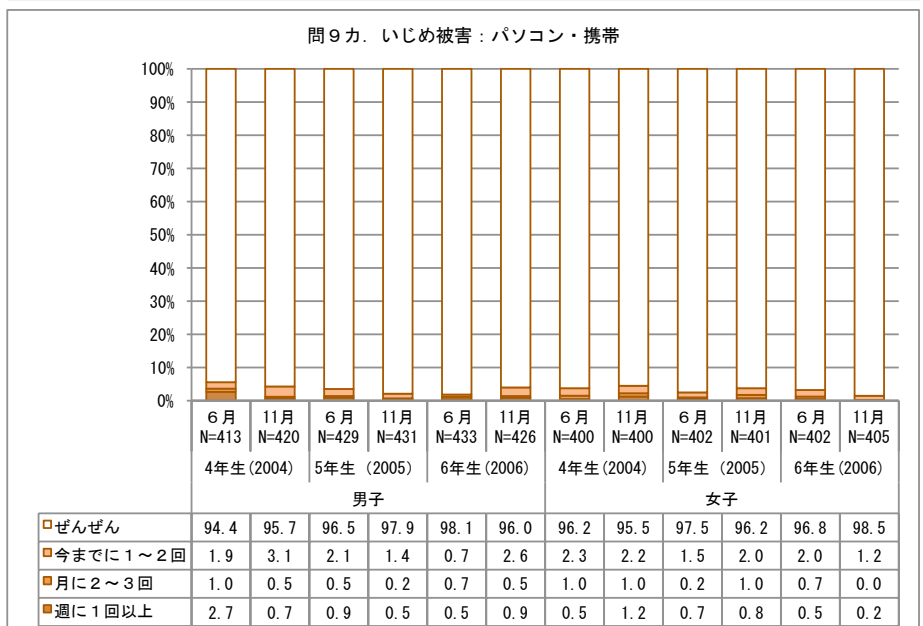
全体で見ると、4年生から6年
生にかけて、少しずつ減少する傾
向が窺えます。

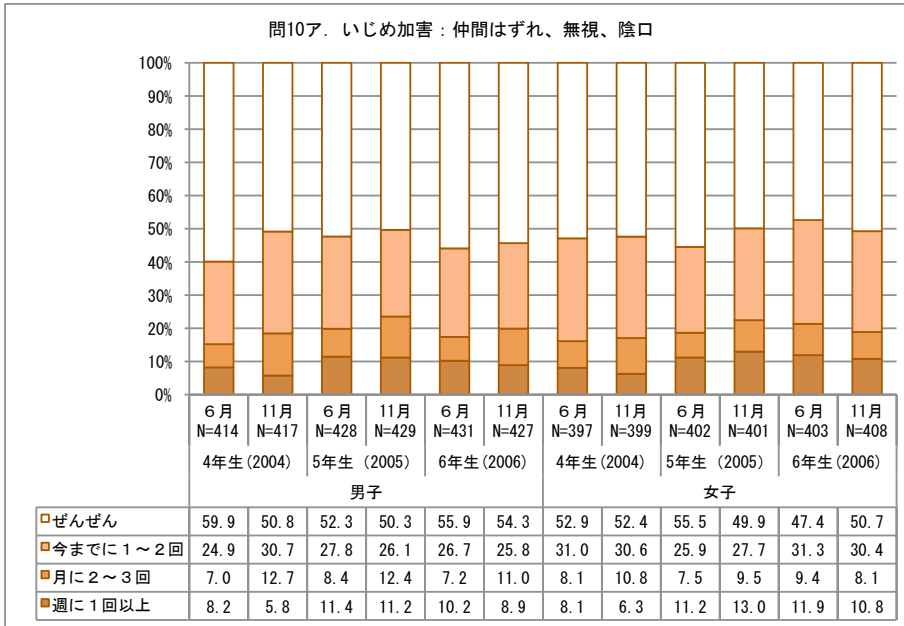


○パソコン・携帯

男女共に、被害経験率が低い行
為です。

学年進行に伴うはっきりした傾
向は窺えません。

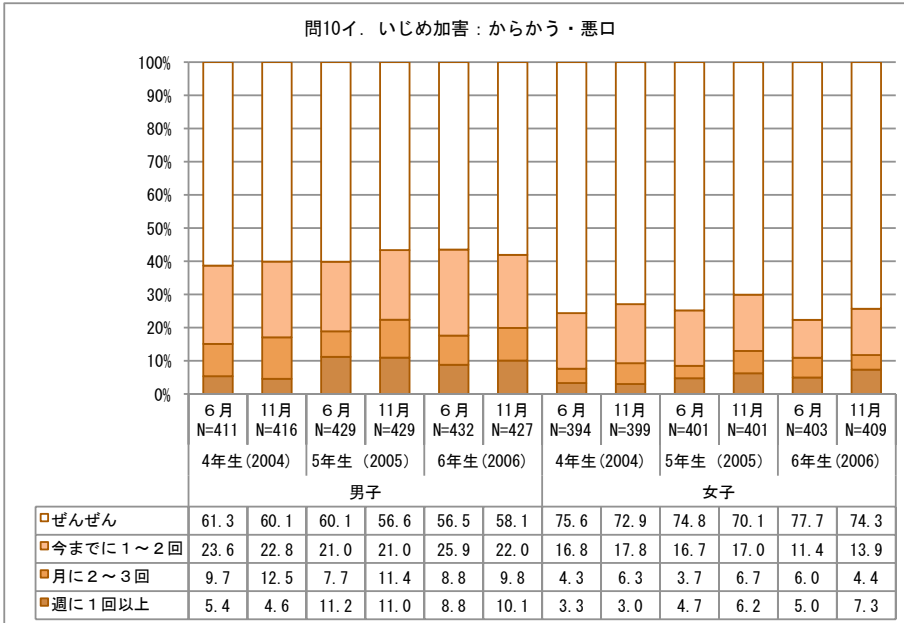




○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に加害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

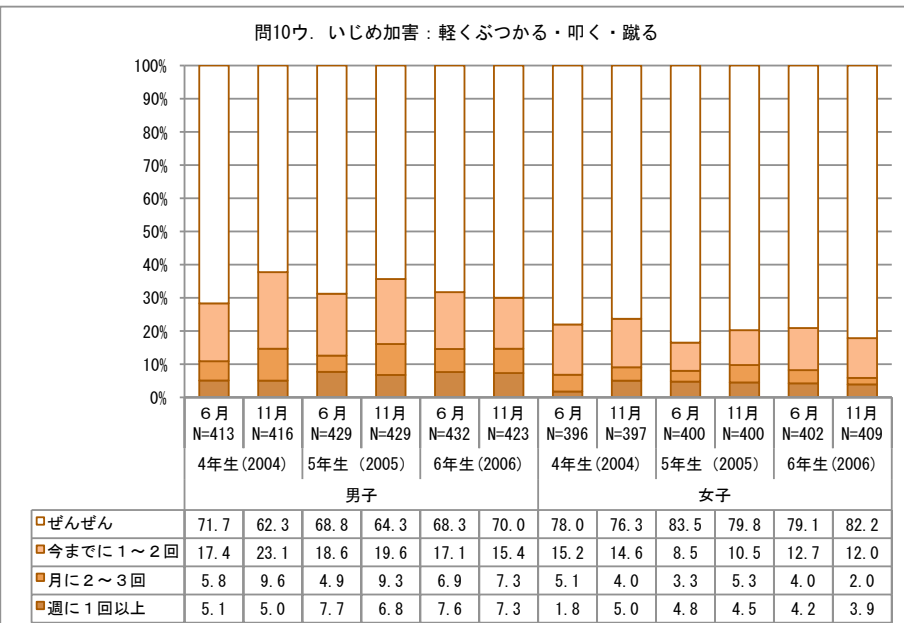
学年進行に伴う傾向は、はっきりとは窺えません。



○からかう・悪口

男女共に加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。

学年進行に伴う傾向は、はっきりとは窺えません。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことが多い行為と言えます。

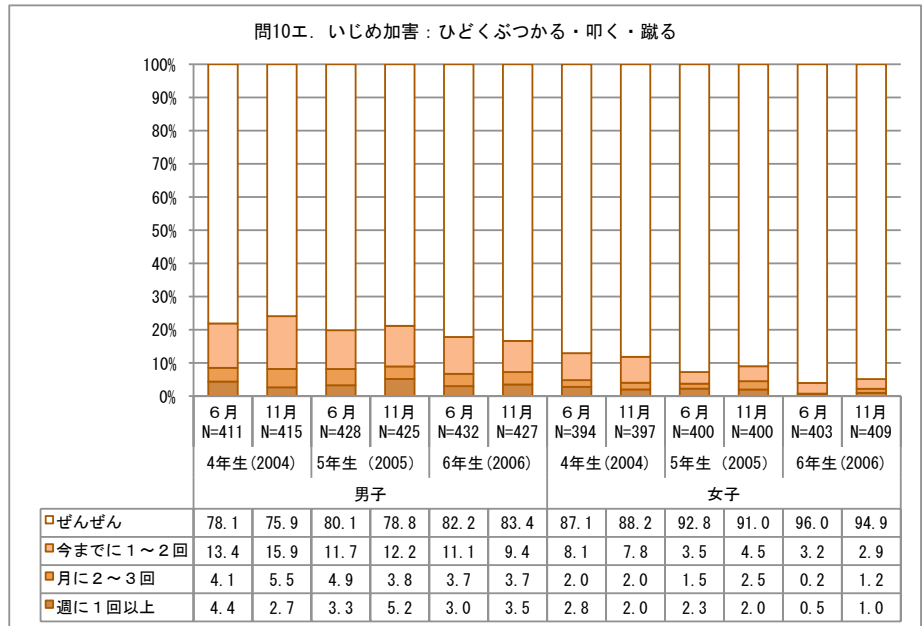
男子に多い傾向が窺えます。

学年進行に伴う傾向は、はっきりとは窺えません。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の加害経験率が高い傾向が窺えます。

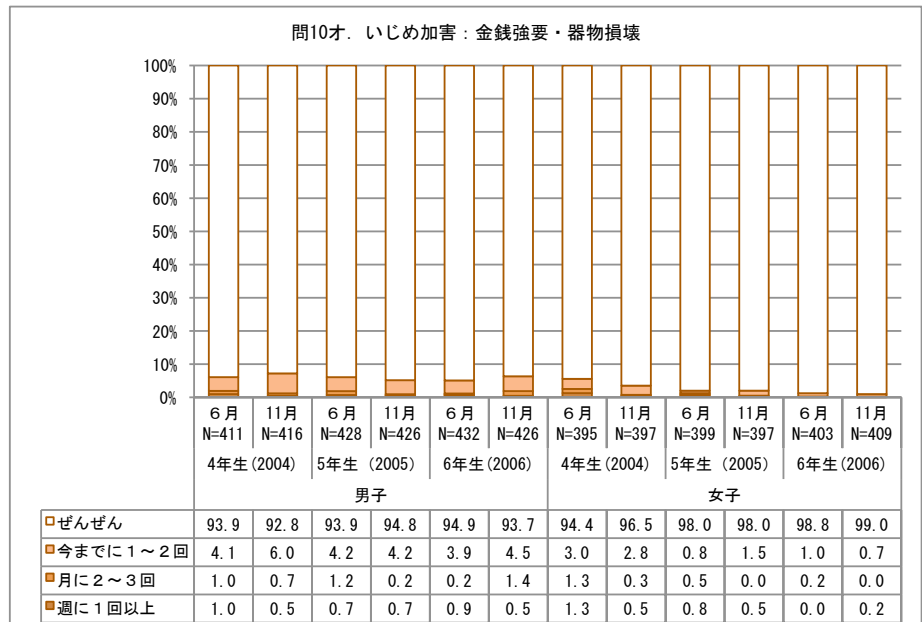
全体で見ると、4年生から6年生にかけて、減少する傾向が窺えます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に加害経験率は低いです
が、やや男子に多い傾向が窺えます。

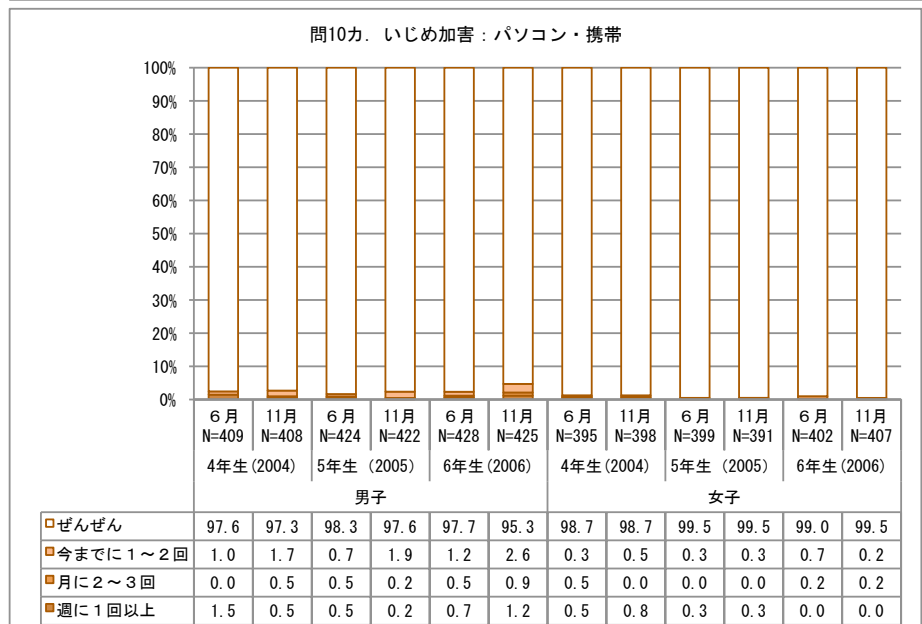
女子では、4年生から6年生にかけて、減少する傾向が窺えます。



○パソコン・携帯

男女共に、加害経験率が低い行為です。

学年進行に伴う傾向は、はっきりとは窺えません。





文部科学省

国立教育政策研究所

National Institute for Educational Policy Research

編集 生徒指導研究センター

T E L 03-6733-6880

F A X 03-6733-6967